



# 藝える

東京藝術大学とコロナ禍。  
その、いま、これから。

藝える 第8号

東京藝術大学

東京藝術大学広報誌『藝える』第8号

発行日 2021年3月24日	写真 富田里美(表紙、P1-27、P34-41)
編集・発行 東京藝術大学『藝える』編集部	校閲 西村 knack 雅彦
編集長 藤崎圭一郎	編集 小林沙友里
アートディレクション 有山達也	事務局 東京藝術大学社会連携課
デザイン 山本祐衣(アヤマデザインストア) 中本ちはる(アヤマデザインストア)	印刷 シナノパブリッシングプレス



●表紙  
工芸科(陶芸)「学部」森聖華(釣りキチ親父)  
好きな釣りの最中に海難事故で亡くなった父の  
骨壺に入りきらなかった骨を「骨灰」として調合。  
生前父が釣り上げた90cmの鯛を父に見立てて焼成した。  
舟盛りの形は作者の出身地長崎で行われる精霊流しの  
精霊船になぞらえている。

●裏表紙  
油画「修士」小澤幸歩(新妻日記)  
\*両作品とも2020年度卒業・修了作品展より

## ◎編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8  
東京藝術大学内 『藝える』編集部  
Fax : 03-5685-7761  
E-mail : toiwase@ml.geidai.ac.jp

# 藝える



「藝える」は「」と読みます。今号はコロナ禍にかかわらず、卒業・修了に向けて、おもに作品や演奏というかたちで研究成果を披露した学生たちを取り上げます。この1年、作品制作もレッスンも学生どうしのコミュニケーションも通常どおりとはいきませんでした。卒業・修了の展覧会や演奏会は事前予約制となり入場制限が設けられました。しかし、彼ら・彼女らの集大成の質が落ちたわけではありません。むしろ、学生たちがこの異常な日常に真摯に向き合った姿勢が反映された質が高い作品が多かったと思っています。今号も一部の記事の企画や原稿執筆を学生編集員に担当してもらいました。次の時代の芸術を担う若い力がこの大学では確実に育っています。そう、私たちは、コロナ禍だろうが、芸術がなければ生きてられない。

藤崎圭一郎 / 美術学部デザイン科教授・本誌編集長

## 目次

### 特集

## コロナ禍だろうが芸術がなければ 生きてられない Part2 「卒業・修了」

01 卒業・修了作品展

08

“密”な関係、ギャップGAPにあり  
グローバルアートプラクティス専攻のこの1年

16

近頃、  
アニメーションをつくる学生が増えています  
学科横断！  
アニメーション座談会

22

学生編集員が先輩に聞く  
卒演出演者  
インタビュー

28

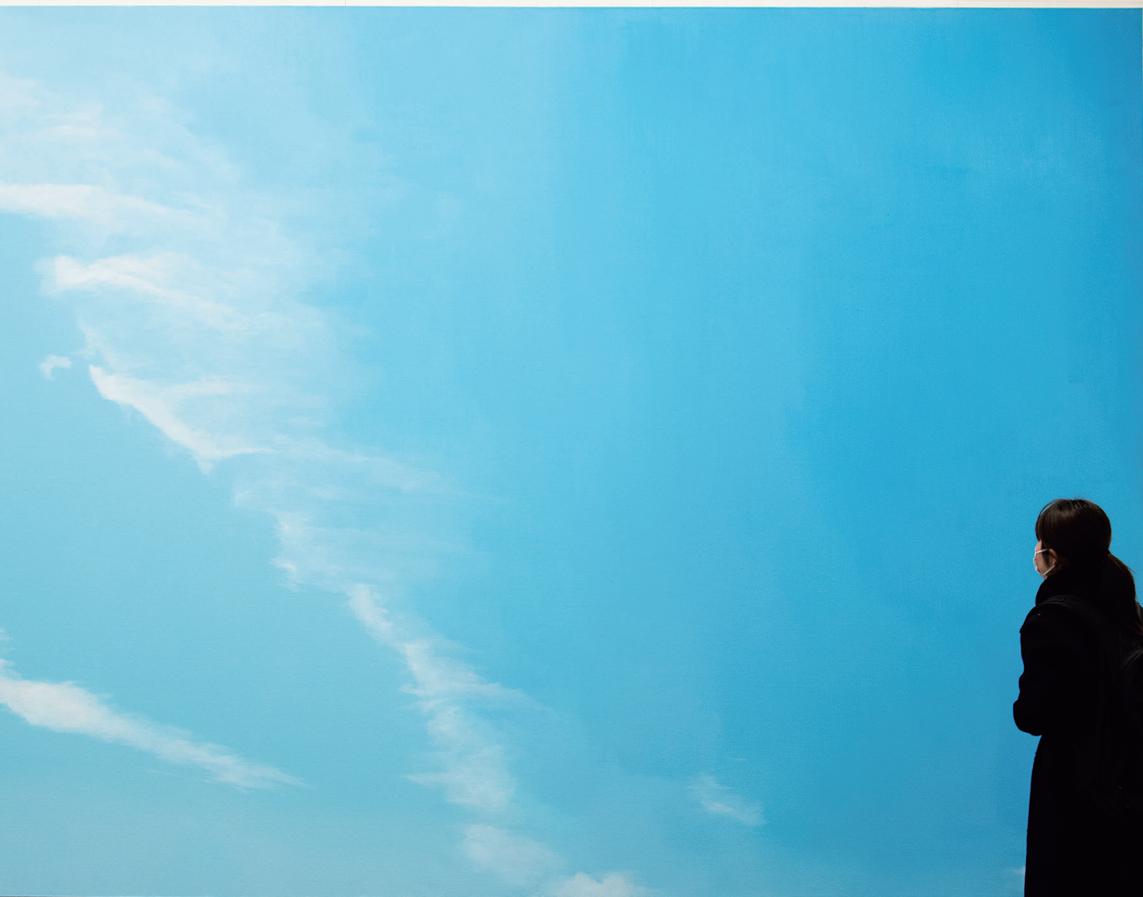
映画専攻15期  
羽納組の修了制作秘話  
いま、  
映画をつくるということ

34

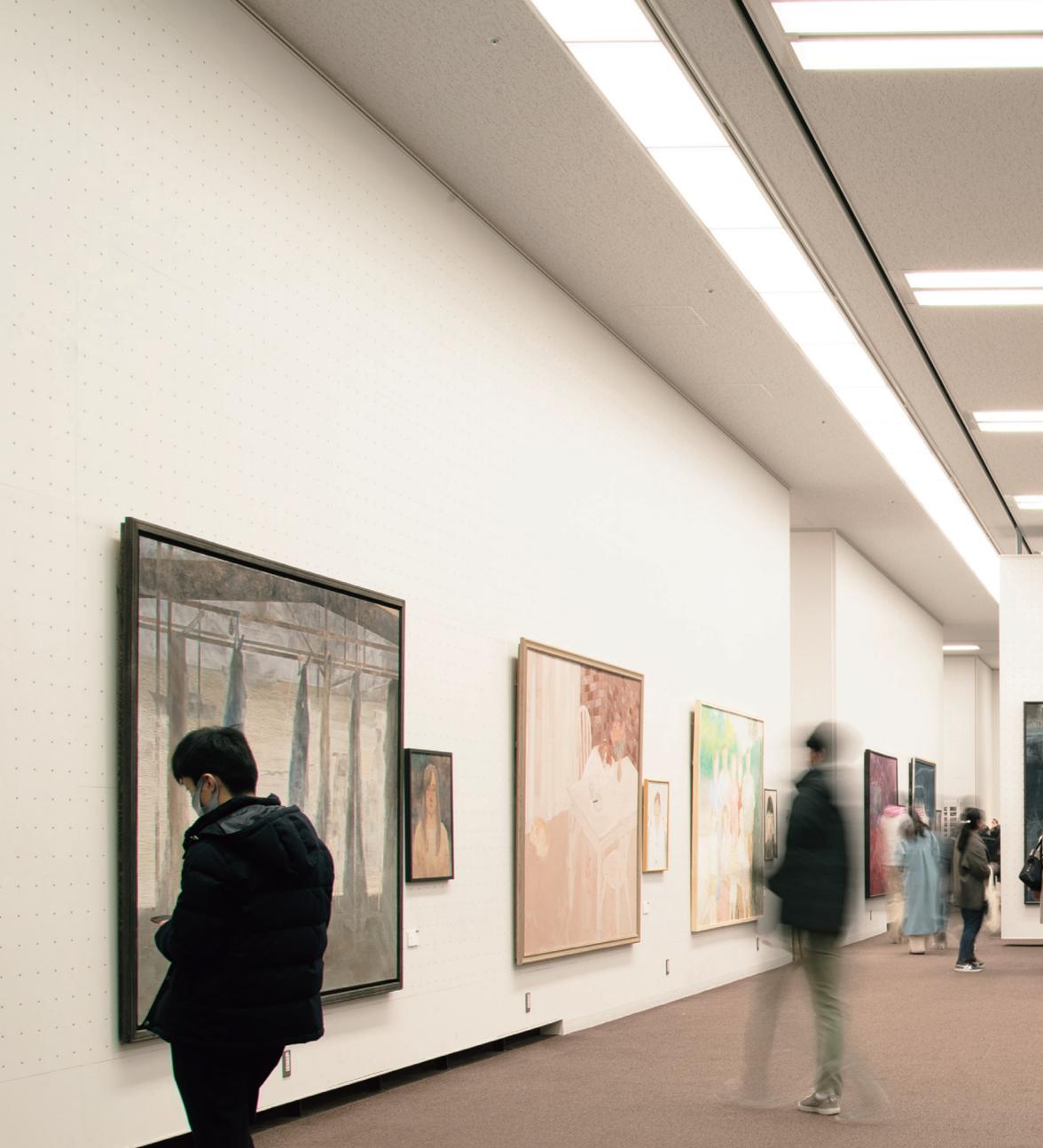
ポスト・コロナの世界で、芸術は、私は  
博士たちは語る

42

お知らせ



12～2月、本学では博士学位審査や卒業・修了に向けての  
展覧会、演奏会、上映会、研究発表が立て続けに開かれます。  
はたして学生たちはこのコロナ禍にどう向かい合い、  
どのような思いで集大成の発表に至ったのか。  
まずは全作品をじっくり見るには2日はかかる  
美術学部／美術研究科の卒業・修了作品展のダイジェストからどうぞ。



特集

# コロナ禍だろうが 生きてられない Part2



芸術がなければ  
「卒業・修了」

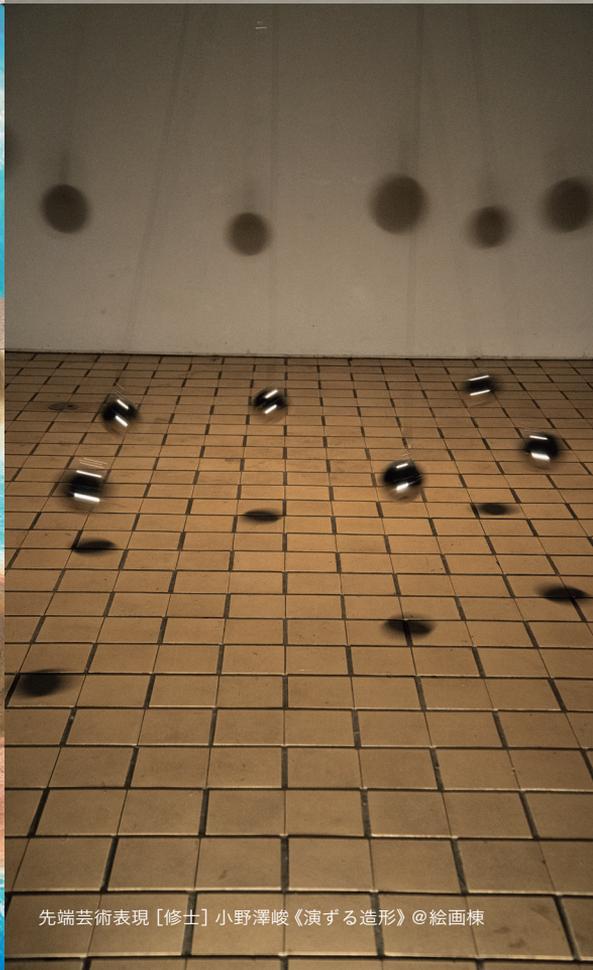
油画 [修士] 高橋成瑠 [治] 《Metamorphose04: 浅慮》@グラウンド



彫刻 [修士] 羽田野皓紳《Muse》@彫刻棟



建築 [学部] 仁科緑《Re:CORONA 生活する島》@東京都美術館



先端芸術表現 [修士] 小野澤峻《演ずる造形》@絵画棟



上：油画 [学部] 川目七生《街角男女備忘録》@東京都美術館  
 左：工芸 (染織) [修士] 曾斯琴《人間花像》@大学美術館本館



日本画 [学部] 右から、可兒貴子〈自画像〉、可兒貴子《水中散歩》  
 太田力天〈自画像〉@東京都美術館



デザイン [学部] 浅井美緒《The BOOK》@東京都美術館



工芸 [学部] 〈自画像〉@東京都美術館



彫刻 [学部] @東京都美術館



右：工芸 (漆芸) [修士] 野田怜眞《forme》@大学美術館本館

上：工芸 (陶芸) [学部] 下城爽《経験の唄》@東京都美術館





右：文化財保存学(保存科学)[修士]平戸杜飛@大学美術館陳列館  
 上：工芸(陶芸)[修士]沈雨虹《破刃》@正木記念館

デザイン [修士] 岡崎龍之祐《JOMONJOMON》@大学美術館本館

(見返しも同様)

彩色部：桃



P1 (芸)



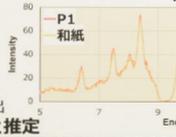
P1 (個)

・ FORS (二次微分)

- P1 (個) :  
 ▼ 543 nm, 498 nm
- P1 (芸) :  
 ▼ 573 nm, 535 nm, 448 nm

R1と同様に、  
 極大よりも短波長側に複数ピークが現れる  
 ⇒アントラキノン系赤色色材と類似

・ XRF



P1 : 鉛 (Pb) 検出  
 ⇒鉛白を含むと推定

彩色部：紫



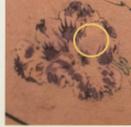
V1 (芸)



V1 (個)



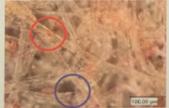
V2 (芸)



V2 (個)

・ デジタル顕微鏡 (700倍)

V1 (個)



アリザリンレーキ+  
 プルシアンブルー



コチニール+  
 プルシアンブルー



V1 : とろとろ繊維が紫色に染色か? 赤色の粒子を確認  
 アリザリンレーキ+プルシアンブルー, コチニール+プルシアンブルー :  
 全体的に青みがかっているが、繊維全体は染まっていない  
 アリザリンレーキの混色で赤色の粒子が確認



# “密”な関係、<sup>ギャップ</sup>GAPにあり

グローバルアートプラクティス専攻のこの1年



大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻(GAP)には  
さまざまなバックグラウンドをもつ学生が集い、  
そこはまるで「多様性」の縮図のよう。  
学生たちの修了作品を見て、話を聞くと、  
時代や社会を映した表現を生むそれぞれの視点、  
そして、コミュニケーションが育んだ  
コロナになんて負けない強い絆が見えてきました。



グローバルアートプラクティス(GAP)は2016年に大学院美術研究科につくられた、まだ新しい専攻だという。茨城県にある取手校地で、さまざまな国からの留学生と日本の学生がともに学んでいて、英語で授業が行われているらしい。そんなざっくりとした情報はあるものの、はて、グローバルア

ートプラクティスとは。世界を見据えたアートの実践?と、わかりそうでわからないというのが正直なところ。ならば、ぼんやりしているよりも直撃すべし。と、修了展スタートの1週間前、修士2年担当の李美那先生と、なかでも特にコロナ禍の影響を受けたという学生7人にZoomで集まってもらった。

「おーい、シュウジはどこにいるの。忘れてるんじゃない? リョウ君、連絡してみてくださいいな」。約束の時間になっても姿を見せない、シュウジさんと呼び出すよう李先生が声をかける。リョウ君さんが電話をしてくれて、「忘れてました!」と、

## ミライ

十時ソフィア未来(ととき・そふいあ・みらい) / スペイン出身。日本国籍。マドリッドの美大を卒業後、GAPへ。修了展では《東京アキチ・プロジェクト》として屋内にブルーシートの作品を、屋外にセメントでかたどった土囊(いくつかは植物が芽を出している)を展示した。



「危なっかしいなあ(笑)」と言う先生につられて皆も笑う。なんだか先生と学生の距離が近い。ファーストネームで呼び合っているのも、温かくてすごくいい感じだ。大学院の研究室という少しお堅いイメージをもっていたのだが、一気に吹き飛んでしまった。長年一緒に過ごしてき

た仲間のようななと思っていると、全員が李先生の研究室の所属生ではないと聞いて少し驚く。というのもGAPでは1年生の終わり頃からそれぞれの研究室(通称ラボ)に分かれはするものの、指導教員同士が学生の情報を共有し合っていて、学年担当もいる。学生はどの先生に相談してもOKなのだとか。なるほど、そんなオープンな環境が皆の醸し出す空気に表れているのだろう。

ちなみにGAPでは定員数の3分の1以上が留学生。今回集まってくれた学生を見ると、半数ほどがそうだろうか。母国を離れて日本で生活するのは大変だろうと想像する。しかも昨年はコロナによる不測の事態が起きた。そこで、ここでは修了展に触れながら、学生たちがコロナ禍でどう過ごし、制作に取り組んできたのか振り返ってみたい。あわよくばGAPがどんなところなのか、ちよっぴり見えてくることを期待して。

## 日本の外にいて感じたこと ミライとシュウジの場合

「海外から来ている学生が多いので日本語が

# GAPがわかるタイムライン

今年修了する2年生のこれまでのあゆみを  
入学から振り返りつつ、GAPの基本情報をおさえましょう。

▼GAPとは？ 正式名称は「東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティクス専攻」。通称 GAP (ジーエーピーまたはギャップと呼ぶ)。グローバルな文脈で現代アートの社会実践を志向する研究と人材育成を目的に、2016年4月、取手校地に新設された。1学年の定員18名のうち1/3以上の割合で留学生を受け入れ、授業は英語で行われる。

## ●2019年

4月 GAPに入学 ※シュウジさんは2018年3月に入学

### 5月 ユニット授業スタート

#### ▼ユニット授業とは？

GAPの基幹授業の一つで、海外の芸術大学とGAPの教員と学生がユニットを構成して行う共同カリキュラムのこと。日本と相手国においてワークショップ形式で授業を開講する。GAP新設年から継続して、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校と、パリ国立高等美術学校と実施。学生たちはこの「ロンドンユニット」「パリユニット」のどちらかに所属し、それぞれのテーマのもとで数カ月間かけて共同プロジェクトを行う。

7月 GAPオープンスタジオ@陳列館 上野の大学美術館陳列館にてユニット授業の成果発表。教員陣によるフィードバック、学生による自己評価と意見交換も行われた。

## ●2020年

3月 『Perception Practice / チカク』展 ユニットのプログラムを含む1年間の活動での成績優秀学生による選抜展を、遊工房アートスペースにて開催。ヒョンさんとリョウさんが選ばれ、レジデンスと制作・展示を行った。

3月 リモート授業スタート 新型コロナの影響を鑑みて、いち早くZoomのアカウントを独自で取得し、学生・教員がコミュニケーションを取りやすい環境を整えた。

5月 オンライン展 4月に予定していた成績評価展に代わり、2019年度の発表展をウェブ上で開催。

7月 フィジカル展 「実際に展示がしたい」という学生たちの声を受け、取手校地で展覧会を開催。

12月 成績評価展 取手校地で開催。

## ●2021年

1月29～2月2日 修了作品展 上野校地で開催。

#### ▼GAPの修了方法は？

修士論文、修了作品 + エッセイ、修了作品 + 修士論文の3つの方法がある。また、作品に付随して400字程度のステートメントを作成することも必須。

## ▼GAPの先生は？



GAP専攻長。建築家。トーキョーワンダーサイト館長、名古屋芸術大学特別客員教授などを経て現職。

今村有策  
教授



工芸科ガラス造形研究室教授、美術学部副学部長も兼任。ガラス工芸作家として活躍。

藤原信幸  
教授



キュレーター。静岡県立美術館学芸員、神奈川県立近代美術館主任学芸員を経てGAPへ。

李美那  
准教授



アーティスト。ドローイングと言語との関係性をテーマに、幅広い制作活動を行う。  
※4月就任予定

鈴木ヒラク  
准教授



アートプロデューサー。演劇、美術、社会関与型アートなどを横断する企画を手掛ける。  
※4月就任予定

相馬千秋  
准教授



アーティスト。さまざまなものを組み合わせ、見えない力を感じさせる作品を国内外で制作。

毛利悠子  
講師

※2021年4月より、GAP専攻を兼務していた篠田太郎准教授は絵画(油画)専攻へ、荒木夏実准教授は先端芸術表現専攻へ配置換え予定

不自由な人もいるし、コロナに感染してしま  
うと孤独を強いられることになる。それだけ  
は避けなければ、と思ったんです」と李先生

は言う。そう、昨年4月7日に緊急事態宣  
言が発令される直前の3月、いち早くリモ  
ート体制へと切り替えたのがGAPだった。

李先生は「気軽に心配事でもなんでも言える  
場をつくらう」と、自粛期間中は週に1度、  
学生がオンラインで先生や助手と自由に話せ



## シュウジ

井上修志 (いのうえ・しゅうじ) / 宮城県石巻市出身。中学3年の時に東日本大震災を経験。多摩美術大学で鍛金を学び、GAPへ。途中、交換留学でドイツに渡った。《日和山の階段を新しい視点まで延長してみる》の側面にあるモニターには、現地で階段を延長した際の映像が。

根荘(取手校地内にある藝大関係者がスタートしてから週5日は、利

多くの人が避難した「日和山」の山頂部へと続く階段を延長する階段状の作品を準備してきた。被災物を彷彿とさせるテレビや冷

たのはストレスでした。日本に戻って、学校で作品を広げて見た時は

8月に帰国した彼は修了展に向け、震災時に

た土嚢をいくつも点在させることにした。「スペインでのロックダウン中

2年間で大きな変貌を遂げた人」と微笑む。

る巨大なブルーシートに、複雑かつ立体的に建物の骨組みを表す直線を

マンズなんて無縁だったから、初めてのことを理解できない言語のなかでやって、視野が開かれた体験だった」と言う。先生も「もの

面白さを感じた彼女がテーマとしたのは、空き地。そこから連想される

参加したパフォーマンズの授業に衝撃を受けたのだとか。学部時代は多摩美術大学の工芸

るッしゃべり場も開設した。  
「去年の3月、ミライはスペインのどこにいたんだっけ？」と尋ねる先生に、「マドリッドです」と答える十時ソフィア未来さんは、日本国籍だがスペイン育ち。マドリッドの美大でファインアートを学んだ後に来日し、GAPの学生になった。昨年の春休みを家族

と過ごすためスペインに帰ったが、ロックダウンによって身動きが取れなくなってしまったのだという。結局、日本に戻ることができたのは7月のことだ。それまではNOO3で学生や先生たちとコミュニケーションを取りながら、自宅で作品の構想を練った。スクラップ&ビルドによって目まぐるしく変化する東京の風景に、スペインにはない

者の宿泊施設「利根川荘」の愛称)に泊まり込み、修了制作に全力を注いできた。  
冒頭に登場したシュウジさんこと井上修志さんは、昨年3月、留学先のドイツ、ミュンスターにいた。GAPでは1年次に数カ月間、海外の芸術大学と共同プロジェクトを行うユニットと呼ばれるプログラムがあるのだが、その際にパリ国立高等美術学校で

蔵庫、電子ピアノ、自転車、日用品などを積んだり埋め込んだりしたセメントづくりの大きな作品だ。「今は海と陸の間に防潮堤が建設されて、住んでいる人も減ったし、僕が子どもの頃に見ていた石巻の風景とはまるで違います。正直いいことだとは思えないけど、これからそこで育っていく子どもたちの存在を忘れてはいけないと思う。さまざまな角度から町を眺めながら、皆で改めて話し合う必要があると思ったんです。日和山から町を一望できる階段をさらに延長して、視点を變えて景色を見てみようと考えました」。11月には石巻市の許可を受けて実際に現地での展示を行い、その後、石巻だけの問題にとどまらず作品に普遍性をもたせることを課題に、修了展ではより彫刻的な要素を帯びた作品へと進化させた。

## 成績優秀者、それぞれの模索 ヒョンとリョウウの場合

次に「昨年3月は遊工房で展示があったから、ヒョンがソウルに帰ったのは夏だったよね」と先生が言葉を向けたのは、GAPに入る

前はニューヨークの大学で美術史を学んだ韓国出身のジョ・ヒョンジュさん。遊工房での展示とは、1年修了者のうち成績優秀者2名が杉並区善福寺にある遊工房アートスペースで制作・展示の機会を

与えられるというもので、ヒョンさんもそのうちの1人に選ばれた。GAPに来たわけを「美術史ではアカデミックな視点から批評するけれど、作家と作品をより深く理解するためには自分も制作することを経験する必要があるんじゃないかと感じてたんです。そういう環境に身を置いてみたいと思うようになって」と話してくれた。修了制作とともに修士論文にも取り組み、論文のテーマは「現代美術作家のキャリア形成と持続に関する研究」。17人の作家にインタビューした内容をもとに、キャリアを築くことが保証されていない作家が作品をつくる動機や目的について考察した。



### ヒョン

曹賢珠(ジョ・ヒョンジュ) / ソウル出身。コロンビア大学卒業後にGAP入学。修了後は、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズの博士課程へ進むことが決まっている。《何か / 常に / 息をする / 私の / 作 / 助ける》ではバラバラになった言葉の欠片に光を当てた。

また、そのインタビュをベースに、言葉を使った作品を制作し、論文と作品が呼応し合う彼女らしい修了となった。

また、ヒョンさんと共に遊工房での展示を行ったのが、名古屋芸術大学卒業後に同大学で助手として勤務した経歴をもつ山口諒さんだ。李先生曰く、「リョウウがお化け」をテーマにしたと相談してきて、最初はどういうこと?と思ったんですが(笑)。それにはわけがあった。リョウウさんは、300年以上もの歴史がある長野県の旧家の生まれ。堂々たる木造家屋の実家は、まさにお化けが棲んでいても合点がいくような雰囲気なのだ。「ず



## リョウ

山口諒（やまぐち・りょう）  
／長野県出身。名古屋芸術  
大学卒業後に同大学の助手  
を経てGAPへ。《白昼夢》  
では、蚊帳とスクリーン、  
プロジェクター、スピー  
カーなどを使い、不確かな  
存在を可視化することを試  
みた。彼自身の経験と社会  
的な事象がシンクロする。

つと、どこか自分の出自に触れるのを避けていたんですね。でもGAPに入ってからさまざまなバックグラウンドをもつ仲間と出会い、国や両親のこともオープンに話してくれることに驚きました。自然と僕も自分と向き合うことになったんです」

修了展では、古くからの言い伝えで魔除け

としての意味をもつ蚊帳を張り、そこに自身が彷徨い歩く映像をプロジェクターで投影する映像インスタレーションを制作した。「今、いろいろな場所でコロナ対策のためにビニールシートが使われていますよね。シート越しに見ると人が少しぼやけていたり、声も届きにくかったりする。この状況も、お化けや不確かな存在とつながるのではないかと」。自身への課題としていた個人的な感情や事柄を扱うことと、社会的な事象をすり合わせた作品となった。

## オンライン展で得たもの ジョンとセピの場合

さて、昨年3月を起点に一部の学生の活動を見てきたが、その頃、修士2年への進級を控えた学生たちは皆、4月に予定されていた成績評価展の準備の真っ最中だった。だがコロナの影響で展示は中止となり、急遽5月下旬に「オンライン展」を行うことに。ウェブの制作は田中ジョン直人さんが買っ出した。アメリカの大学で美術史と農業を専攻し、日本の企業の研究所に勤めた経歴をもつ

彼は、帰国子女でバイリンガル。時には皆の通訳としてひと肌脱ぐという頼れる存在だ。

「僕はGAPで、取手校地がなぜ取手の小文間という土地にあるのか、関係者の話や資料をもとにリサーチするプロジェクトを行ってきました。もともと人に話を聞いたり一緒に何かをするのが好きなので、コロナ前は誰かのプロジェクトに便乗してしまうことも多く、自分の制作や研究に集中する時間を十分に取れていなかったんです。でも自粛期間中は外出できず一人になって、自分の前には外パソコンだけ。そんな状況になったことでネット上にある取手校地の情報は全部見た」と言えるようにしようと、逆にエンジンがかかりました」と話すジョンさん。本人自らガイド役となり、取手校地を巡りながら歴史やエピソードを交えて案内するという企画を準備していた。オンライン展のためにバーチャルツアーへと変更したものの、取手の風景写真や地図、縁のある著名人の写真などを用いてガイドを行い、「実際のツアーでは回り切れない場所も横断することができて、いい面もあった」と言う。

また、イラン出身で、母国でドキュメンタリー写真家として活動してきたセピデ・ハシエミさん（愛称はセピ）は、修士1年の時にユニットで参加したパフォーマンスの授業を「イランでは、特に男性に混じって女性が身体を使って表現するのはタブー視されるので、私にとってすごく勇気のいることでした。でも自分の殻を破りたい！」と挑戦して自信が「いた」と振り返ったうえで、こう話してくれた。「GAPでは、カメラを使わない表現を模索してきました。だから4月の成績展ではフィジカルな要素の強いインスタレーションを構想していたのですが、ウェブ上で見せるのは難しく、写真作品に変更することに。でも、自粛期間中は写真を撮ることで気を紛らわすことができたし、原点回帰して何を表現したいのか見つめ直す時間になりました」

ウェブ上でどうプレゼンするかそれぞれ試行錯誤し、練り上げてきた作品の変更を余儀なくされながらも前向きに捉える姿が頼もしい。だが、本来画面で見せることを予定していたわけではなく、身体性をテーマにした大きな作品や、マテリアルが重要になる作品に

### フィジカル展で戻ってきたものクレムの場合

「どうしても実際の展示がやりたい！」という学生たちの熱望によって、7月に取手校地でフィジカル展が実現する。ちなみに、この展覧会にテーマを表すようなタイトルはない。学生と教員で4月の成績展をどんな形で行うか話し合った際、「展覧会のテーマに合わせてつくるのではなく、自分たちがつくりたいものを思い切りやった作品を評価してほしい」という学生たちの意見が採用されたからだ。さらに学生たちが人選した批評家も招いた。通常なら教員が決めるようなことも、学生たちが自主的に深く関わってつくり上げていくのは、GAPならではの。



### ジョン

田中ジョン直人（たなか・じゅん・なと）／東京都出身。カリフォルニア大学デービス校卒業。日本の大手メーカーに勤務したのち、GAPの学生に。《東京芸術大学取手校地30周年記念展》と題し、これまで取り組んできた取手校地が位置する小文間の歴史と証言を展示した。

「自粛期間中はZOOMでみんなと話したりはしてたけど、何か失われそうになっていく感覚があった。でもその感覚が7月のフィジカル展で一気に戻ってきた感じでした。制作するうえで、人とも物とも対面してコミュニ

てのプロジェクトに取り組む先述のジョンさんは、オープンカーを用意し、助手席にお客さんを乗せてツアーを実現。オンラインでは得られなかった、説明の隙間にある何気ない会話の大切さに気づくことができたという。また、セピさんは母国イランで食される羊の脳ミンソと写真インスタレーションを展開した。



ケーションすることが大事で、大きな喜びになっ  
ていているんだと改めて思いました」と話す  
のは、イギリス出身のクレメンタイン・ナッ  
トさん(愛称クレム)。建築の修復家として  
のキャリアをもつ彼女は、金継ぎを学ぶため  
来日、美術学部工芸科の研究生となり、その  
後GAPへ。制作した壺を一度壊して金継ぎ

し、新たなものにするという作品を制作して  
きた。フィジカル展ではその実物を展示し、  
実際に見ることの大切さを再確認したという。  
ただ、学内外でさまざまなプロジェクトに参  
加したりと精力的に活動を行ってきたクレム  
さんだが、コロナによって工房が使用できな  
い期間が続き、悩んだ末に修了を一年延期  
することを決断した。

### みんなバラバラだから 大変で、面白い

### セピ

Sepideh Hashemi (セピデ・ハシェミ) / イラン出身。  
テヘラン芸術大学卒業後、ドキュメンタリー写真家とし  
て活躍。GAPでは「マテリアリズム」をテーマに制作し、  
写真や肉の破片を使った《Did I meat you last night?》で  
は、性差なく「人は皆同じ「肉」である」の意を込めた。

学生たちの顔ぶれと活動の場は本  
当に国際色豊かだ。しかし、多様さ  
は国籍に限ったことじゃない。日本  
国籍でも英語のほうが得意な人もい  
れば、少し前まで会社員だった人も  
いる。既にキャリアをもつアーティ  
スト、実技は初心者という人もいて、  
実にバラバラなのだ。「国籍や言語  
が異なるだけではなく、多様なバック  
グラウンドをもつ学生の集まりな  
んです」と、李先生が言葉に力を込  
めるのにもうなずける。学生たちを

見ていると、助け合い、尊敬し合い、高め合  
うという、密なコミュニケーションが結  
んだ絆が見えてくる。グローバルとは、人々  
の多様性を享受したうえで、共働できる場や  
方法を探すことだと改めて気づかされるのだ。  
そして彼らの修了作品からは、そのコミュ  
ニケーションこそが、時代や社会を反映した  
表現の強度をさらに増していると感じさせら  
れる。またそれを生み出す個々の視点は、コ  
ロナ禍を悩みながらもポジティブに駆け抜け  
てきたことで深度を増したといえるだろう。  
4月からは、このGAPでの経験がそれぞれの  
バックグラウンドへと仲間入りして、皆  
また異なる地を目指して進んでいく。  
最後は、ジョンさんの言葉を借りて締めく  
くりたい。「GAPはギヤップ」と読むこと  
もできます。留学生も日本人もいて、そこ  
ではいい意味で矛盾やすれ違いが起きたり  
する。それは会社のなかでも、社会で生き  
るうえでも思うことです。また、日本が  
グローバルスタンダードを目指すことで、  
得るものも失わなければならないものも  
ある。そういうさまざまなギヤップを含  
めて、GAPだと思っ





学生編集員  
音楽学部作曲科3年  
内田拓海

学生編集員  
音楽学部楽理科2年  
渡邊真衣

学生編集員  
音楽学部  
器楽科ヴァイオリン専攻1年  
丸山怜子

美術学部  
先端芸術表現科4年  
川畑那奈

音楽学部  
音楽環境創造科4年  
永田風薫

美術学部  
デザイン科4年  
高田潤

大学院映像研究科  
アニメーション専攻修士2年  
松岡美乃梨

学科  
横断!

## 近頃、アニメーションをつくる学生が増えてます アニメーション座談会

テレビでも映画でも動画サイト上でも世を席卷するアニメーション。アートの世界でも、その表現の可能性に注目が高まっています。われらが藝大においても学科横断的に制作されている今、当事者たちは、いかにして手法やテーマを究めているのか？学生編集員が、各科で注目のクリエイターたちに尋ねました。

**内田** 『藝える』ではこれまで美術学部の彫刻や絵画といった作品を紹介したり、音楽の演奏をする人にインタビューしたりすることはあっても、映像を特集することがあまりなかったように思います。その機会を設けたかったということ、学生編集員からも「アニメーションって面白いじゃないか」という声があつて……。皆さんは所属する科が違ふし、卒業制作の作品を拝見しても、それぞれ

に手法や雰囲気違いますね。  
**松岡** アニメーション専攻は大学院のみで、例年は1学年16人くらい。でも、今年はコロナの影響で休学を選択された方も多かったので、修了生は9人です。手法は、大学院に入学してから学ぶことも多いですが、本当に興味の赴くままに手法を追求していて……。他科でアニメーションをつくっている方がいることは、展覧会や発表の場で作品を見て知ることが多いですが、

みなさん、一から学

んで自分でつくっていくという点ですごく

挑戦的だと思うし、

よく研究されている

なと感じます。

**高田** 僕はデザイン

科で、もともとはア

ニメーションという

よりモーショングラ

フィックス(テキス

トやイラストに動き

をつけた映像)から

始めました。2年生の後半に課題ではじめて

つくった映像を「いいね」と言ってもらえた

ことからハマっていった……。ストーリー入

りの作品をやるのは卒制がはじめてだったの

で、脚本にいちばん力を入れました。

**川畑** 高田さんの作品、映像だけでなく小

説的だなと思いました。新海誠監督の初期の

作品に、ちょっと近いムードがありますよね。

**高田** 本当ですか？ 王道ですけど、新海さ

んや細田守さんの作品は好きで見えています。

デザイン科でもアニメーションをつくる人は

増えている……。のかな？ でも、発表される

映像作品を見るときは、若干ライバル心をも

ちながら見ていたりしますね(笑)。

**川畑** 私のいる先端芸術表現科では、アニメ

ーションをつくる人は多くなくて、私も最初

はテキストベースのインスタレーションなど、

かなり違うことをやっていたんですけど、得

意な絵を生かすためにはどうしたらいいんだ

ろう？という考えでアニメーションをやり始

めました。個人的には世の中で生きているな

かで感じたこと、社会の情勢を風刺的に眺め

ることから発見したアイデアを、見下ろすよ



初挑戦だから  
いちばんやりたいことを  
やりました

たかだ・うのお / 1997年生まれ。卒業制作『赤いランプが揺れている』は、生きることに倦んだ主人公が死んだ人の視線で世界を見る「幽霊体験」を通し、生の意味を捉えなおす短編。実写映像にエフェクトをかけてつくったリアルなアニメーションと詩情豊かな台詞が紡ぎ出す、幻想的かつ切実な世界観が光る初監督作。

うなワンカット……私はこれを「神の視点」  
って呼んでいるんですが、風景のアニメーシ  
ョンで構造的に何かを伝えるということをや  
っていきたくて思っています。卒制は、そうし  
た意味で学生時代の挑戦の集大成になっ  
ていくのかな？と思っています。

**永田** 僕は音環（音楽環境創造科）ですが、  
川畑さんのように大きなテーマの作品だと、  
音楽をつけるのが難しそうですね。

**川畑** そうなんです。音楽の人には、途中ま  
でできた時に見せて「とりあえず、つけてく  
ださい！」とお願いしたんですが、すごく困  
らせてしまったんじゃないかと……。教授か  
らも「ディレクションが下手だ！」と叱られ  
ました（笑）。そのあと、完成した全体を見  
せて、さらにつけてもらったという感じです。  
**永田** でも、ダンスミュージック風の音が効  
いているなと思いました。僕は卒制を3つ作  
っていて、うち2つが3DCGの作品。正直、  
あまりアニメーションということは意識して  
つくっていませんでしたので、お声がけはいた  
いたんですが、もしかしたら僕はこの記事の

企画にはそぐわない  
人間なのかもしれま  
せん（笑）。

**内田** いえいえ。

**永田** でも、確かに  
CGもアニメーシ  
ョンのひとつだしアニ  
メを見るのは好きな  
ので、接点もあるに  
はあるのかなと……。  
今の映画って、ほぼ  
全作品にCGが使わ  
れているし、技術的

にもすごく洗練されて、たとえば人の描写に  
関してはほぼ実写と遜色ないくらいのもので  
つくれるようになってます。もとは限りな  
く現実に近い模倣だったはずのCGが、社会  
に対してもの申せる範囲が大きくなってきて  
いるなかで、じゃあそのリアリティーってど  
こにあるんだろう？と……。こういうことを  
考えているとついつい話が大きくなっていく  
ので、そのうち「自分ってなんだろう？」み



「神の視点」で  
世の中を俯瞰、  
風刺し続けたい

かわばた・なな / 1998年生まれ。シンプルな手描きの線をアニメーション、モーショングラフィックスの技法で躍動させた卒業制作『WEATHER MAP』は、ごく短編ながら人間社会の不条理性を突き詰めた一作。「風景を引いて見せることだけを決めてつくりました。風刺精神を制作の柱にして、これからも取り組みます」

たいなところまで広がって、疲れてしまっ  
ですけど（笑）。

**松岡** フフフ。確かに、永田さんの作品の宇  
宙の映像には実写とは違うCG特有の素材  
感が表現されていて、面白かったです。

**永田** そうですね。個人的には、CG特有の  
バグ（不具合）的な要素に、逆にフェティッ  
シュというか、魅力を感じたりしています。

**松岡** 私の修了制作はコマ撮りのアニメーシ

ヨンで、これまでずっと切り絵アニメーションをつくってきたんですが、今回、はじめてオブジェクトアニメーションに挑戦してみました。制作は、テストを含めて7カ月くらい。登場するキャラクターのひとつにうさぎのぬいぐるみがいるんですが、このうさぎが見聞きしたことを再現ドラマ化するかたちになっていて、それが部屋にこもって一人でつくっている感じとリンクして、独特なムードになったんじゃないかと思います。

#### アニメーションはコロナに強い？

#### 四者四様のステイホーム制作

**丸山** 私は音楽学部の1年で美術学部のことをほとんど知らないのですが、生音やコミュニケーションを重視する音楽と違って、美術の方々はもともと個人作業が多いのでは、という認識でした。アニメーション制作にも、やはりコロナの影響はあったのでしょうか？

**松岡** そうですねえ……授業もリモートになって、「本当に自分は藝大生なのか？」と感じたことはありましたね(笑)。コマ撮りに関してはもともとひとりりでやっていくしかな

いんですが、昨年までは学校に登校して制作していたのがコロナで難しくなったので、その状況を逆に生かそうと、自分の部屋で身近なものを使ってつくりました。

**高田** 日用品や食べ物など、ひとつひとつに命がこもって、めっちゃめっちゃユニークでした。

**永田** とくに、食べ物や飲み物の扱い方ですごく難しいじゃないですか。たぶん、たくさん実験をされたんだろうな……と。

**松岡** そうですね。テーブルクロスに広がるシミの広がり方など、予想した以上にうまくいったという偶然にも助けられました。入学して間もない頃、学科の先生が「制約がアイデアを生む」とおっしゃっていたのですが、まさにその言葉が現実になったというか……。もしコロナが流行しなかったら、まったく別のモチーフを使っていたかもしれないですね。

**永田** 音環は卒制審査が他の学科に比べてちょっと早く、11月なんです。去年は10月まで学校に入れなかったんで、家で制作をしていたんですが、作品に出てくる大きな什器を塗装するために部屋の半分くらいを養生したりとか、けっこうしんどかったです。

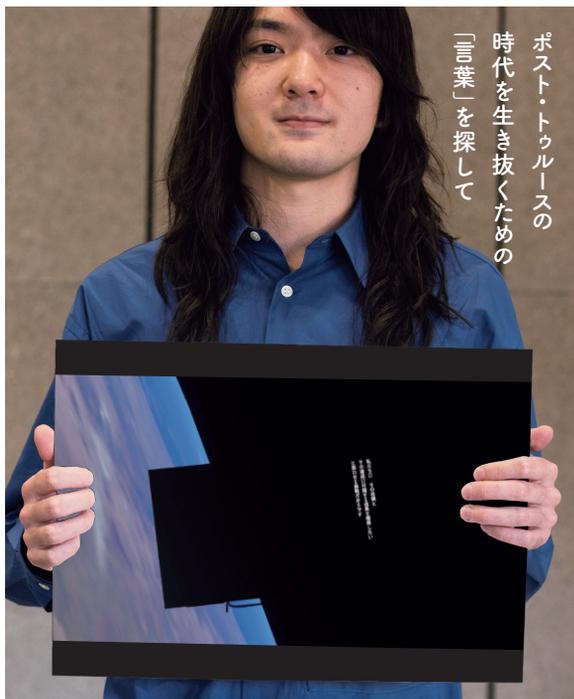
**川畑** 私は手描きのアニメーションなので、自分自身の作業としてはコロナじゃなくても引きこもってやることになったと思うんですが、たとえば音楽をつけてくれた人と一度も会わず、オンライン上だけでコミュニケーションを取りあっていたのは、やはりコロナだったからだろうなと思いますね。

**高田** 僕も自分ひとりでの制作なので、そんなに影響はなかったけど、しいていえば普段はノドワーカーなので、行っていた店が早く閉まるのが困ったことくらい(笑)。声優さんの声入れも、プロの人に相談して、ほとんどチャットでのやりとりになりました。

**松岡** コロナの間にリモートの環境が整ったというのは、やはり大きかったですよね。でも、学校だと周りに人がいることで「ああ、私も頑張らなきゃ」という気持ちになれますが、ひとりだと集中できる半面、だらけてしまうような時間もありました。

**永田** 取材やリサーチに行けなくて困ったなあ、というのもありましたね。それと、家でひとりでCGのレンダリング(映像や画像を書き出すプロセス)をしている間、すごく暇

ポスト・トゥルースの  
時代を生き抜くための  
「言葉」を探して



ながた・ふうか / 1998年生まれ。関心領域は「メディア・記録・都市」。実写映像・3DCGを用いてポスト・トゥルースの時代の真実に迫った『Fly Me To The Moon』ほか、卒制は三部作の大作に。「あらゆるジャーナリズムが力を失いつつある今、思考を通して自分の言葉で語ることがますます大事になっていくと思います」

ぱり残念だったなと思えます。

**高田** 僕も、大スクリーンで見えていただけならなあ……と。映画用の大画面と、スピーカーから出てくる音は、スマホの画面で見る映像やYouTubeから流れてくる音とはまったく違うので。卒業も、今年は人数制限があ

な時間があったので、めちゃくちゃ長く散歩ができたりにして、意外と健康的な日々だったのかもかもしれません(笑)。

**川畑** アハハ！ 生〃というところでいうと、アニメーションはやっぱ劇場や大画面で見てもらうことが大事だと思っていたんですが、コロナの影響で映画館が閉まったり、映画祭が開催されない状態が今も続いていて……。大画面や大音響が消えたということは、やつ

って例年より見てもらえないまま終わったのは、ちょっと悔しかったです。そのうちまた、公開できる機会があるとは思ってます。

**内田** それぞれ、ご苦労があったんですね。私は今、AMC(東京藝術大学芸術情報センター)の授業で知り合ったデザイナーの人と一緒に作品をつくらうとしてるんですが、アニメに音楽をつけるだけでなく、逆に音楽からアニメをつくってもらうなど、交流がもつ

とできたらいいのかなと思いました。  
**川畑** 確かに、音楽学部との関わりは、けっこう頑張らないともてないですよ。音環とは交流があったりしますけど、器楽科の方とは本当に接点がないなあと感じていて、そういうことができる、また楽しい可能性が増えるんじゃないでしょうか。

**渡邊** 音楽学部の中でも、私のいる楽理科は「何をやってるんですか？」って聞かれることが多いんですが、実は皆、アニメや映像にも興味があるし、マルチにいろんなことができる人が多いので……って、何だか学科の宣をかけたいただけじゃないかな(笑)。声ので、輪が広がってほしいなと思います。

### 独自の手法とメッセージで 世の中に作品を投げかけたい

**内田** 皆さん、それぞれ卒業・修了されるわけですが、今はどんなことに興味をもっている、今後、どういうアプローチで作品をつくりたいか、どうしたいか、どう思っているんでしょうか。

**高田** 僕は今のところ広告系の会社に就職予定です。卒制はアニメでしたが、本当は実写でやってみたかったので、いずれは実写の映像作品を、と……。でも、僕はあくまでデザイン科出身なので、デザイナーとして課題に応えるということを基本にしたい。何というか、幸福な人のためというよりは、今、大変な立場にある人を少しでも幸せにする作品づくりを心がけていきたいと思っています。

**川畑** 私は、大学院を受験中です。実は、アニメーション専攻を目指してまして……。

**松岡** わあ。

**川畑** そうなんです(笑)。大学院に進むことができたなら、テーマは学部時代同様、ワンカットの手法と眺める視点にはこだわってきたくて、そのなかで自分なりの社会風刺をしたいけたらと思っています。

**永田** 僕も映像研究科のメディア映像専攻を受けています。川畑さんの風刺じゃないですけど、僕も作品への向かい方として、社会や世の中での出来事をよく読んで解釈して……。とくに今は、あらゆる関係性がディスプレイとそこに映し出される映像を媒介して発生し

ている世の中じゃないですか。その傾向はこの先数十年は続くだろうし、そんな世の中にいて、個人としてどう振る舞うべきか、作品づくりを通して自分なりの解決策を提示していきたいと思っています。

**松岡** 私は修了後、とくに進路を決めていないんですが、作家として作品はこれからもつくり続けていくつもりでいます。大事にしてるのは「どういうアイデアで、何をやるか」ということ。つくり

たい物語が自分のなかから湧き上がったから、それにどんな手法が合っているのか、まずそこを探ることから始めて……。そして、どんな手法を選択するにせよ、人のために私にできることは何だろうか?ということは、常に考えていたいと思いますね。修了制作は、

コロナで暗い世の中だからこそ、明るくポジティブな作品にしたいと思ってつくりました。周りの人を楽しませたいし、自分も楽しみたい。そのことは、きつとこれからも、ずっと変わらないんじゃないかと思っています。

**内田** ありがとうございます。私たちもこれからアニメーションをつくる人たちに、いろんなかたちで関わっていかれたらと思います。**渡邊・丸山** ありがとうございます!



暗い時代にこそ  
楽しくポジティブな  
作品を届ける

まつおか・みのり / 1995年生まれ。広島市立大学在学中の作品『おやすみ、コンビニ。』でTOHOシネマズ学生映画祭ショートアニメーション部門準グランプリ。修了制作『Destiny』は身近な素材を生き生きと動かし、女子の恋愛模様を点描したコマ撮り作品。ほのぼのとした画面とブラックな視点、語り口のギャップが愉快。

学生編集員が先輩に聞く

# 卒演出演者

# インタビュー

コロナ対策のため観客の人数を制限した学部4年生の卒業試験公開演奏会、修士2年生の修士学位審査試験演奏会。その集大的演奏はどうだったのか。そこに至るまでのこと、これからのこと。音楽を学ぶ学生が3人の先輩に聞きました。



オーケストラという何十人もの大所帯を束ねる指揮者。オーケストラ公演の際には厳戒態勢がしかれた今年度、指揮科の竹内さんは卒業試験を通して何を感じたのだろうか。

## 失敗を経て体得したものの

「うーん、どうしようかな……」。1日目のリハーサルが終わった後、竹内さんは少し落ち込んだ。プロのオーケストラである藝大フイルハーモニア管弦楽団を指揮し、2日にわたるリハーサル、本番の計3日間が審査対象となる指揮科の卒業試験。初日は久しぶりのオーケストラを前にしての指揮で舞い上がってしまい、うまくいかなかったという。しかしその後は挽回することができた。「自らの表現したいことを相手に伝えること、また、オーケストラとともに進んでいく意識をもつことが指揮者に求められます。試験を通じて、オーケストラの音を聴きながら一緒に音楽を進める感覚をつかむことができました」

## 有意義だった「おうち時間」

今回選んだ曲はストラヴィンスキーの『火

音楽学部指揮科4年

# 竹内健人



たけうち・けんと／本番を終え、やりきった表情を浮かべる竹内さん。洗足学園音楽大学にサクソ専攻で入学。演奏を学ぶ傍ら、桐朋オープン・カレッジで指揮を学び、藝大へ入学した。

さに触れたことも大きかった」

ちなみに、自粛期間中は「ポジティブにごすことができました」と明るい言葉が。オーケストラの作品を聴いたり、本を読んだり、ピアノや和声を勉強したりと、大学生活で学んできたことを整理する時間がとれたという。

## 全員で一つの音楽をつくる

生演奏を届けられる場が完全には戻ってきいてはいないなか、竹内さんは今までのスポットが当たらなかつた役割に関心を寄せる。「卒業試験ではステージマネージャー、助手の方々が感染症対策を含め、演奏を支えてくれていることを強く感じました。オンライン公演などでは録音、編集を担当する方々も重要です。そうした音楽に関わる人全員で一つの音楽をつくる結束力を大事にしていきたいですね。そして今回の試験で感じた指揮の本質をこれから見失わないようにしたい」。難しい現状に向き合いながらも、プロの指揮者になる未来を熱いまなざしで見据える竹内さん。これから自分自身に、どうタクトを振るのだろうか。

の鳥」。本番では、長調で華やかな音色を引

き出す竹内さんの、情熱的な指揮姿が印象的だった。それには、短調で学生生活を終えたくないという思いとともに、指揮科の宿題も影響を与えたという。「レッスンは半年ほどなかった私たちに与えられた宿題が、ストラヴィンスキーの『春の祭典』を振れるようにするということでした。そこで彼の作品の良

卒業では奏楽堂で藝大フィルを指揮。的確に指示を伝えるその姿は、若いながらも貫禄さえ感じさせる。

奏楽堂に足を踏み入れると、目に飛び込んでくるのは荘厳な佇まいのパイプオルガン。一人オーケストラとも称されるこの楽器を、手を使い、足を使い、全身で表現するのはオルガン4年の栗山さんだ。

### 練習時間が激減するなかで

藝大にはパイプオルガンの練習室がいくつもあるが、普段から練習時間は限られていた。「それぞれバロック向きのもの、ロマン派以降に向けているものなど、演奏できる時代が違いため、練習室を取るのが大変で。特に1、2年の頃は空き時間を狙って朝7時半に登校することもありました」。そして学部最終年度、コロナ禍で前期は大学への立ち入りが制限され、後期は延期となっていた演奏会や教育実習が重なるという事態に。練習機会が限られるなか、卒業演奏会直前まで試行錯誤の日々が続いた。

### 19世紀の曲にコロナ禍を重ねて

今回演奏したのは、19世紀ドイツの作曲家、ユリウス・ロイプケが24歳で亡くなる前年に

書いた大作、オルガン・ソナタ『詩篇94』。「最初はこれまでこの曲を弾いた先輩への憧れもあり、30分の大曲を演奏する場として卒業演奏会がふさわしいと考えて選びました。でも演奏を繰り返すうちに、この曲の内容が、今のコロナ禍の激動と重なるように感じたんです」。目まぐるしく展開される冒頭、穏やかな中間部、決然とした壮大な終末の3部分か



くりやま・みお / 奏楽堂のパイプオルガンを自在に演奏する栗山さん。オルガンとの出会いは中学時代の課外活動。中高一貫のミッションスクールで、藝大へ進む先輩も多く、自身も目指した。

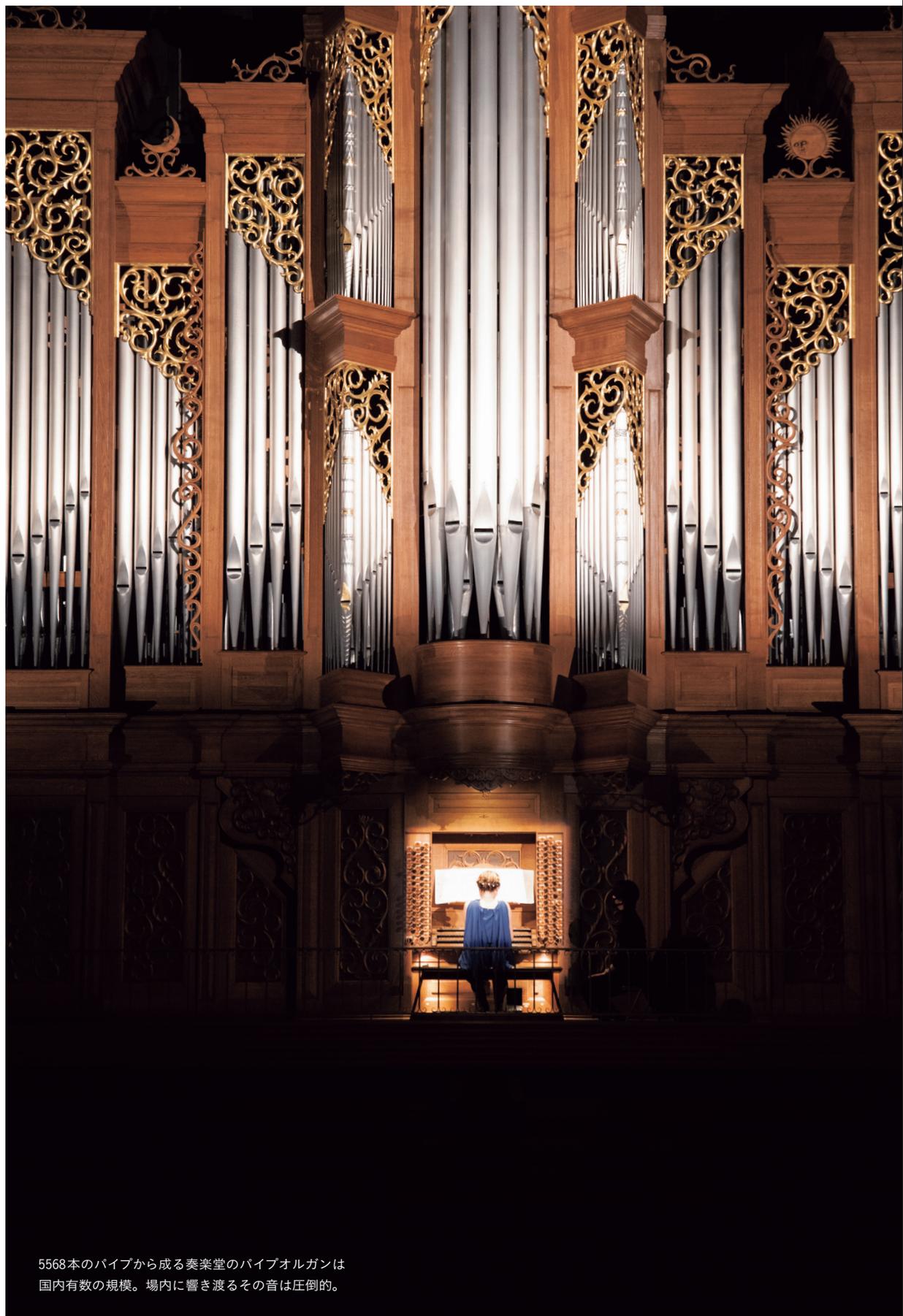
らなるこの曲は、旧約聖書の詩篇第94篇に示された「報復の神」を音楽で表現している。「冒頭ではコロナの猛威や激動の波が感じられ、中間部ではそこに一筋の希望が見える。最後には人間の報復、その確固たる意志が表れているように思いました」

### 心動かすものの必要性

卒業演奏会を終えた栗山さんは充実感を溢たえた表情でこう語る。「今年度初めはほとんどの演奏会が中止となり、私たちは必要とされていないんじゃないかと思ってしまうこともありましたが。でも今回、自分の演奏を楽しむに聴きに来てくれる人がいるというのは純粹にうれしかった。そしてこの状況だからこそ、心動かすものとして芸術や私たちが必要とされているんだと感じることができました」春からは大学院でオルガンの修士1年として学び続ける。「学部では演奏の土台をつくったという感じです。これからですね」。音楽を通して自分を見つめ、藝大での第2章を始めようとするその表情はまぶしかった。

## 栗山美緒

音楽学部器楽科オルガン4年



5568本のパイプから成る奏楽堂のパイプオルガンは  
国内有数の規模。場内に響き渡るその音は圧倒的。

室内楽は一人ではできない。人とのつながりが制限されるなか、誰かと演奏することが前提にある室内楽の大光さんが感じたことは。

## 演奏はエネルギーのやりとり

大学院で室内楽を学ぶ決め手になったのは、「第一線で活躍する素晴らしい先生(ピアノ)と組んでレッスンを受けられること」。だがそのレッスンはコロナ禍ではかなわなかった。自粛期間中、ピアノ伴奏を務める入江一雄先生とは週1でZoomで話をしていたという。

「演奏を合わせるということは、コミュニケーションション、いわばエネルギーのやりとりだと思うんです。だからリモートでやるのも、録音したものに合わせるのも無理がある。でも一緒に楽曲分析したり、好きな演奏家について話したりしていたおかげで、自粛明けにはスムーズに合わせられました」

学位審査試験では、シューマンとブラームスのソナタ2曲を計1時間にわたって弾ききった。それはコロナ禍でのレッスンの支障を全く感じさせない、二人の密な調和に魅了される演奏であった。大学院では演奏に加えて

研究も求められるが、今回の演奏会には、古楽器であるバロックヴァイオリンに触れた経験や、作曲当時の演奏法を現代の演奏にどう生かすべきか悩んだ日々が集約されていた。

## 音楽の力を伝える企画

昨年8月に自ら企画した演奏会『終わりなき終わり』を「変容」する』もコロナ禍での



おおみつ・かりと/愛知県豊田市出身。ヴァイオリンとの出会いは2歳で目にしたテレビの教育番組。幼少期からヴァイオリニストを志し、学部は藝大の音楽学部器楽科でヴァイオリンを専攻。

芸術を意識する契機となる。ここでは、心音を思わせる「100台のメトロノームのため」の「ポエム・サンフォニック」、戦争犠牲者の追悼が背景にあるとされる「メタモルフォゼン」(23の独奏弦楽器のための習作)という曲目構成に加え、聴衆が演奏者の間に点在するという配置にもこだわった。「一時、公演が全くなくなるなか、何かできることはな

いかとリモートアンサンブルなどさまざまな方法を模索しました。しかし、この公演のリハーサルで音を出した時の生のエネルギーのやりとりは忘れられませんでした。今まで音楽の何に魅せられて音楽家が続けてきたのかを改めて感じました」

## 殻を破ってくれた時間

修了後は演奏活動が続ける一方で、演奏会の企画もしていけたらという。「知識を得るほど考え方が凝り固まっていく気がしていましたが、コロナ禍で生まれた考える時間が、思考の殻を破ってくれました」。未曾有の危機のなかでも考えることをやめない先輩の姿に、藝大生の強さを感じた。

# 大光嘉理人

大学院音楽研究科器楽専攻  
室内楽(ヴァイオリン)修士2年

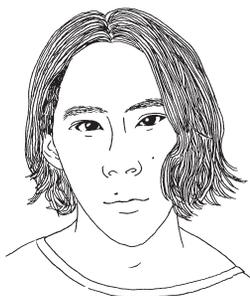


第6ホールでの学位審査試験演奏会。クールな大光さんだが、演奏中は伸びやかに全身を使い、秘めた情熱があふれていた。



美術領域2年  
岩船 めい

いわふね・めい／生活感や人の痕跡など、「汚し」を考えたものづくりをしている。いつか廃墟や古い家のセットを立てて作り込みをしたい。



監督領域2年  
羽納 拓未

はぶと・たくみ／学部は武蔵野美術大学造形学部映像学科卒業。監督作に『ウサギとそば』『夜のテニスコート』など。趣味はおもちゃ集め。



脚本領域2年  
小林 令奈

こばやし・れいな／東アジアの安全保障を学んだ慶應義塾大学法学部時代にドキュメンタリーを制作、国際平和映像祭でグランプリを受賞。

## 映画専攻15期 羽納組の修了制作秘話

# いま、 映画をつくる ということ



サウンドデザイン領域2年  
王 昭珩

おう・しょうげつ／中国の黒竜江省ハルビン市出身。中国伝媒大学時代も映画音響を専攻。最近では武俠ドラマを見るのはまっている。



編集領域2年  
陳 詩婷

ちえん・しーていん／台湾出身。日本で驚いたのは、編集ソフトの表記が全てカタカナなこと。いまは英語版も日本語版も使いこなす。

制約を覚悟し、集大成に向けて動きを止めなかった羽納組の面々。  
メインスタッフ7名の言葉を  
後輩の立場から見つめる。

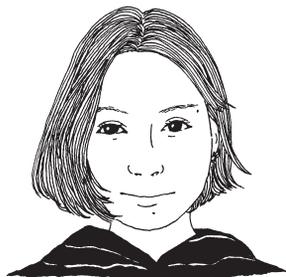
文＝菊地真里那(映画専攻脚本領域1年/学生編集員)

イラスト＝久野未結



プロデュース領域2年  
山崎 公太

やまざき・こうた／インターン含め現場に積極的に参加し、経験を積む。制作部を主役にしたバックステージの物語を企画立案中。



撮影照明領域2年  
藤田 恵実

ふじた・めぐみ／学部時代は武蔵野美術大学で写真を専門にしていた。周囲を手伝ううちに自らも映画の道へ。パカンス映画が好き。

ステイホームが言い渡されたとき、映画人の多くが目の前で閉ざされた扉の重さに、一度言葉を失った。それは映像研究科映画専攻の学生にも同じことで、実践を通して映画づくりの力を身につけるはずの2年間で強制一時停止され、何をすればよいかわからなくなつた。なかでも、2年生のいちばんの懸念は、修了制作がどうなるのかということだった。

監督領域の多くの学生にとってデビュー作としての意味合いも強い修了制作。当然、それに携わるすべての学生にとってもターニングポイントとなりうる作品である。部屋の中でパソコン画面に映る教員や仲間と向き合いながら、不安を拭いきれない学生の多くが、いったん足を止めることを選択肢とし、4人中3人の監督は休学を決めた。しかし、予測できない未来を恐れて、芽吹きかけた表現の種をふいにしてもいいものか。1年後、同じように芽吹くとは限らないのではないか。そう自問した一人の監督は、休学ではなく、暗雲に光を見いだすことを選んだ。そして、2020年度映画専攻唯一の修了制作作品、羽納組『Song for Laurel』が生まれた。

## 降りかかる未知の制約

「最初は全然休学するつもりでした」

今年度の修了制作を決意した監督領域2年の羽納拓未さんも、この状況になんら不安がないわけではなかった。しかし——  
「つくりたいものに対するエネルギーが冷め



羽納組による『Song for Laurel』の撮影風景。宿泊NGの制約で苦戦したロケ地選びのなかごぎつけた、館山砂丘での撮影。

ないうちにやりたいと思うようになりました。1年待ってもどうなるかわからないなら、先に飛び込んだほうが得かとも思っただんです」

実際、各々悩み抜き、担当教員との話し合いも経た結果、蓋を開ければ監督領域以外の同期の学生で休学を選択する者は少なかった。そのため、なじみのメンバーをメインスタッフとして組むことが可能となった。映画

専攻の修了制作は、監督領域の学生が企画を立て、長として引つ張るが、同時にその作品にメインスタッフとして参加する各領域2年生の修了制作でもある。

しかし、動き始めるとやはり例年とは違う事象が足枷あしかせとして次々と出てくる。留学生も多く在籍する美術領域2年の岩船めいさんは言う。

「美術スタッフは6人中3人が中国にいる状況でリモート打ち合わせを開始しました。中国では□□が使えないですし、ロケハンの制約があるのも美術を考える上では致命的で、リモートではできないことが多いと実感しました」

リモートの難しさは準備段階にとどま

らず、編集段階でも痛感することになる。インターネットを通じてのデータ授受が容易になった昨今では、物理的距離があってもどうにかなるのではと考えたが……簡単ではないとサウンド領域2年の王昭瑛さんは言う。

「CMなど短い映像ならなんとかなるかもしれませんが、映画だと監督と一緒に見て直接話を聞けないのは厳しいです。一度学外の仕事でリモート確認後に、電話で監督に指示をもらいましたが、やりにくさがありました」

映画づくりにおいて、同じ空気を共有できないのは相当な痛手で、目を合わせた向かい合うコミュニケーションのなかで生まれるものは、思っている以上に大きい。

もちろん最も人が集まる実際の撮影現場でのイレギュラーさも計り知れない。プロデューサー領域2年の山崎公太さんは、新たにできた「衛生部」を、嘘みたくない部署だと語った。「コロナ以前は影も形もなかった役割だからだ。そこに人員・お金・時間をかけることは不可欠です。でも不謹慎ですが、この状況自体が一步引いてみると映画のように思えてきます。例えば、フェイスシールドをしたままキ



フェイスシールドをつけた演者に指示を出す羽納拓未監督(右)。小道具として使う食べ物のルールも厳しく、いつも以上に細心の注意を払う。

ていくしかない。撮影照明領域2年の藤田恵実さんはその一つとして、撮影部ならではの悩みを教えてくれた。

「マスクやフェイスシールドをした状態でのテストは、慣れるのが大変でした。キャストの表情も動きも制限されて本番同様に動けず、テストとしての役割を十分に果たせていなかったと思います」

本来テストで照明のバランスや画角の調整をして本番に臨むが、感染対策でぎりぎりまでマスクなどを外さないため、いざ本番で白飛びしてしまったり、動きを追いきれなかったりした。次第に色味や露出の誤差を予測して調節できるようになったが、この状況に慣れてしまっていくものかと悩むこともあったという。

サウンドの王さんも、普段はテスト時の音声も編集次第で使えるが、マスクをしていると音質が違うため使えない、とこぼす。このように、技術系領域ならではの新しい悩みが尽きないことを思い知ると同時に、適応していく様に、2年間で積み上げてきたものの大きさを感じた。

## 枷があつてこそ見えてきたもの

制約はたしかにたくさんあつた。コロナがなければと思うこともあつた。しかし、修了制作での制約による悔しさは、表現の幅を狭めることとイコールではない。その悔しさや縛りから各々が表現の可能性を捻り出す。

3・11のときに「不要不急」の芸術に身を置く人々があつた迷いと比較しつつ、ときに危険を冒してまでいま映画を撮る必要があるのかという問いを常にもつていと語るの、先ほどマスクやフェイスシールドの問題に触れた撮影の藤田さん。しかし同時に、この状況下でこそ湧いた興味について話してくれた。「コロナ禍になり、初めて会った人の顔を見る機会は少なくなりました。食事や煙草のときに初めて見て想像と違うと思つたり、見てはいけないものを見てしまった気分になつたりします。それ以前まではあたりまえに晒されるものだったはずなのに。そこから、顔自体が映画を物語ることに、本当に必要なのかと考えるようになりました」

映画におけるコロナの扱いについての考え



モニターで確認する撮影の藤田恵実さん(手前)。マスクをしているとカメラのファインダーがくもってしまうのが難点だった。

も一人ひとり違う。脚本領域2年の小林令奈さんは、現在進行形である未知数の状況を扱うことの難しさに言及しながらも、フィクションだからと現実の状況を闇雲に避けることには警鐘を鳴らす。

「ある状況を描くということには、自分だけが知っている日常ではなく、多種多様な日常

をわかった上で描くという責任が伴います。たしかに、物語の目的に適した形をとっていくべきで、リアルを無視することが最適な場合もあります。が、すっぱりと抜け落ちてしまふことは、表現者の責任からの逃げにつながるような気がしています」

『Song for Laurel』は、もともとあつた愛が失われて取り戻そうとするも空振りに終わる話で、舞台設定としてコロナの世界線は無視されている。なぜなら羽納さんは、スクリーンという境界を挟んだ向こう側とこちら側は違うほうがよく、また、人と人をはじめとする全ての事象を分断するコロナは、スクリーンを介さずとも既にフィルターのようなものなので、直接映画にする必要はないと考えているからだ。しかし、この作品を修了制作として形にしたのには、無意識ながらタイミングの影響もあると内省する。

「普段から将来的にやりたいなあというアイデアが漠然とあつて、タイミングが来ると固まる感じなんです。外に出られなくなつて一人で家にいるときに、自分

がいなくても世界が成立することを再認識しました。そこから『人は一人である』という意識が強固になり、今回の作品を形にすることにつながったといえるかもしれません」

### そして次なる始まりへ

いままでとの違いを乗り越えた1年がもうすぐ終わる。羽納組の面々は、修了後に進む道筋をどのように見ているのか。

編集領域2年の陳詩婷さんは、台湾からの留学生。卒業後はビザの問題がよりシビアになるため、会社への所属が必要となり、タイムリミットと働き口の心配を同時にしなくてはいけない。しかし、故郷と日本それぞれで得る仕事のメリット・デメリットを分析した上で、数年は日本で働きたいと考えている。

「故郷のほうが仕事を見つけやすいかもしれませんが、日本は映像制作に携わる人口が多いので作品の量も質も高くなります。将来的にベースはアジアでやっていきたいですが、国際的な作品に関わるチャンスがあれば参加したいですし、最近では配信作品が増えている影響で映画とドラマの境界も良い意味で曖昧



キャストが使用するワイヤレスマイクは直接肌につけるため、例年のように使いまわすことはできず、一つ一つ毎回の消毒を徹底した。

になりつつあるように思います。いろいろな経験を積みながら、どんなケースにも適応できる力をつけていきたいです」

プロデューサーの山崎さんは、修了制作の期間もその前後も、学外の現場に制作部として関わっているという。同様に、映画の現場で経験を積みたいと考えているのが、美術の

岩船さんだ。藝大での学びで自分のデザインした空間が形になることにやりがいを覚え、今後も映画美術に携わりながら自分にしかつukれない空間を模索したいと考えている。一方、撮影の藤田さんは、フリーランスで映画にこだわらず、CMやウェブなどの仕事にも関わっていきたいと話す。その傍ら、大学で出会った人たちと小規模でも自主制作を続けていくことはやめたくないという。このように見ていくと、映画専攻における「卒業」は、あまり区切りとしての意味合いが強くないように思う。学びと職が続きであり、学びのなかで得たつながりから、各々が可能性を見いだしていく。

そして、羽納組のなかでもコロナの影響で特に大きな計画変更を余儀なくされたのが、脚本の小林さんだ。昨年夏に4カ月ほど韓国の大学への留学を予定していたが、中止になってしまった。日本から出られなくなったからこそ、修了制作に深く関わられた面もあるというが、もともと海外志向の強い彼女に自身の行く先はどう映っているのか。

「コロナ以前は、卒業したら留学で固めた地盤を生かしてすぐにでも韓国や中国の現場に入りたいと考えていましたが、この状況では難しいです。年2、3回は海外に行っていたので、はやく海を渡りたいという気持ちは強いですが、映画専攻に入って、周りから就職を急かされることもなくなりましたので、良くも悪くも焦らなくなりました。でもやはり、一つのコンテンツを一つの国だけで消費する時代は終わりに近づき、つくり手も日本のシテムだけでは生きていけなくなると思います。日本らしさを尊重しつつ、無国籍・多国籍になっていくであろう映像作品に適応できる場所を模索していきたいです」

脚本家はアーティストだけでなくデザイナーの側面もあると語る小林さんらしい見解だ。監督として、今年度唯一の修了制作を率いる長として、穏やかな口調を崩さないもの。まだまだあがくと意欲をにじませる羽納さんの今後の展望は――

「修了制作が終わったら考えようと思っていたので、未定です。これまで学生としてしか映画をつくってきていないので、一度就職

することも考えていて。でも、今回の制作で監督としてやりきれずに悔しいこともたくさんあったので、それを生かすためにも間髪入れずにまた制作をしたい気持ちもあります」

例年通りの渋谷ユーロスペースでの上映が3月12～14日に決まり、横浜の馬車道校舎での修了制作展も3月27・28日の開催が決定した。学びを深める機会は年度末のぎりぎりまで終わらない。

映画専攻での学びは、出会い、言葉を交わし、表現し、形にすること、それら全ての要素の積み重ねにより深められていく。それはこの場を卒業しても変わらないひとつの型であり、よりそれに特化した濃密な時間が与えられるのがこの2年間なのだ。各々がそこで見て聞いて感じて吸収し、思考してきたことを役割ごとに結集させた修了制作は、一人ひとりの異なった才能と力の結晶ともいえる。その作品が、それを目にした誰かの新たな表現の種となり、いつの日かまた別の誰かの道標として芽吹いたとしたら。いま、映画をつくることで生まれたつながりは、どこまでも広がっていく。



### 羽納組の修了制作作品 『Song for Laurel』

恋人・学の父が死んだ。連絡のつかない彼を心配して、留学先から帰ってきたトウコ。彼女は共通の友人である植物学者・佑の家で、学が庭の月桂樹を描き続けているのを発見する。そして学はその月桂樹こそが佑なのだ話し――。ギリシャ神話のダフネーとアポロンの話をもとに語られる、愛と孤独の神話。



ポスト・コロナの世界で、芸術は、私は

# 博士たちは語る

学校が閉鎖され、授業は遠隔になり、人との交流を妨げられる。アートを学ぶ学生たちにとって、試練の1年が過ぎた。そんななかで学生生活最後の1年を過ごした、博士後期課程の学生たち。困難を乗り越え開催された博士審査展、博士学位審査演奏会で、彼らはそれぞれに、今いるここ、そしてこの先を照らす光を放った。

文 大谷道子

《Ripple》内部。水の波紋に見立てた光の輪が、一日中、表情を変えながら床の上をたゆたう。日中は40ルクスト、茶室よりやや明るめの空間に、外気が心地よく循環する。

「座りますか？」

2020年も終わりに近い冬晴れの昼、博士論文発表会はそんなひとことで始まった。

上野校地の美術学部総合工房棟3階のルーバルコニーに建造された、板張りの細長いテントのような空間。漆喰の床面に、プリズムを取り付けた天井のパイプから太陽光がスポットライト状に広がる。風が吹けば、また鳥が空を横切れば、その光は点滅するように揺らぎ、ときには虹のような色彩が浮かぶ。

主査、副査の教員陣を含め、居合わせた誰もが審査会であることを忘れて光に見入り、時にそぐわないくつろぎを感じていた。西毅徳さんの博士課程修了制作《Ripple》（＝波紋）は、いつまでもそこにいたくなる、コージーナ空間を内包している。晴れて本当によかった、と作者は屈託なく笑う。

「最初のイメージは、水切り、なんです。小石を投げて、それが湖の水面を飛んでいって、波紋ができていく感じ……。あの有機的な動きを、細長い空間の特性を利用して表現できるんじゃないかと思って」

光は偶然の産物であり、輪の動きは無造作

自分はずっと

変わらなくて  
いいんだと思つた

## 西毅徳

大学院美術研究科美術専攻  
デザイン研究領域



にし・たかとく / 1989年生まれ。多摩美術大学環境デザイン学科を経て藝大修士課程へ。コロナ収束後は「昨年予定していたオランダ留学を。あと、オーロラを見に行つて作品にしたい」

うんですよ。単に自然を真似るんじゃないで、規則的で幾何学的な形を取り入れたくて。人間がつくる建築の空間と自然の要素を合わせるときに、自然では絶対にできない新しい景色が生まれる、それが僕の作品づくりのテーマなので。夕陽の時間になると、またいい感じに光が変わり始めるんですよ」

（私が行っている研究とは、光の空間を作り出すことである）。博士論文「光が織りなす現象と空気感」の冒頭が象徴するとおり、修士課程で藝大に入学して以降、西さんは5年間、光の神秘性と向き合ってきた。そして、光とともに常に念頭に置かれていたのが、作品から漂う「空気感」。それを意識した最初の体験をたどると、小学生の頃に遡る。

に見えるが、建造物の高さや幅、天井からの距離、パイプの構造、さらにはファサードから漏れる光や風の量まで、空間は完全に設計されている。自然をそのまま切り取ったわけではないことを、作者自身も明言する。「人間がやるからこそできる形というのを求めています。それが建築の空間のよさだと思

「よく学校をサボってたんですが、夏の暑い日の昼頃、学校の近くの神社に行つて、社を囲む玉垣の上で寝っ転がってたんです。外は暑いのに石は冷たくて気持ちがいいし、木漏れ日がきれい、木の葉擦れや遠くの子どもの声が聞こえて……。そういう空間が自分にとってのもっとも居心地がいいんだろうなあと

というのが、ずっと残ってて」

当時の夢は、建築士になること。高校卒業後、専門学校でインテリアデザインを学び、就職を試みるも失敗。「デザイン科があることすら知らなかった」状態で美大受験を志した。そのときから、原体験である心地よい空気を再現することへの試みが始まった。

「まったく、想定外でしたね(笑)。大学を卒業したときも就職を勧められましたが、とどまるんじゃなくて常に移り変わるものにこそられる僕は、商業的なものづくりには向かないだろうなと思って……。デザイン科にいなから、こんなことを言ったら叱られるかもしれませんが、僕は自分が見たい、感じたい作品をつくっているんです。クライアントがいて社会があつて人がいて、というよりは、まず自分が見たいし、体験したいものを」

しかし、《Ripple》の波紋は、作者の予想を超えて多くの人の胸に広がった。制作に関わった人、見に来た人、ときには展示を手伝ったスタッフまでもが、手を止め、足を止め、作品の空気感に浸った。まるで自然のなかにいて、景色や波、夕陽を眺めるように。



「だから、もう変わらなくていいんだな、と思いましたね。まず自分、というつくり方であつても、そうやって生まれたものを他の人  
にいいねと言ってもらえることが、やっぱり

僕のなかでは安心につながるんだと。自分のやり方で、自分が求めてつくる空間は、ほかの人がどこかしらで求めているものなんだろうなということが、今回、改めてわかったような気がするの」

光。風。温度。空気。言語を超えた心地よい感覚は自然の景色のなかにあり、それは必ず再現、共有できる——西さんのものづくりの核にある自然への信頼は、新型コロナウイルスの流行という、ある種マイナスの自然現象を経た今も、少しも揺らぐことはないという。

「疫病って、人間が騒ぐだけのことじゃないですか。僕が見て、感じている自然は、太陽だったり、風だったり、大地だったり、植物だったりする。マイナスといえど海外と行き来ができないことくらいですが、その間研究を重ねれば、結果としてプラスの時間になる。けっこうポジティブに捉えています」

春からは建築研究領域の博士後期課程に入  
学し、今度は構造を学び始める。理想の空間への布石が、またひとつ確かになる。

自分の肌感覚の  
届かないところにも

「世界」がある

## 遠藤麻衣

大学院美術研究科美術専攻  
油画研究領域(壁画)



えんどう・まい / 1984年生まれ。7/2  
より六本木の21\_21 DESIGN SIGHT  
GALLERY 1&2で開催される『Rules?』展  
で《I AM NOT A FEMINIST!》を再演予定。  
アートZINE『Multiple Spirits』も継続。

女性を象徴する生き物といえば、何を思い  
浮かべるだろうか？ そのひとつに蛇がある  
ことを、彼女——遠藤麻衣さんの作品を見  
て思い出した。たとえば、能『道成寺』など  
知られる安珍・清姫伝説。あるいは、『肥前国  
風土記』の弟日姫子の物語のように、自分と  
交わった男の正体が蛇であることを知った女

性が異世界にさらわれる「蛇交譚」と呼ばれ  
る伝承も存在する。この蛇交譚に想を得て制  
作されたのが、遠藤さんが博士審査展に発表  
した《蛇に似る》。映像や写真など複数のメ  
ディアを駆使し展開する連作である。  
「ウィーン留学中、世紀末美術と日本の近代  
美術の影響関係をリサーチしていたんですが、  
そこでクリムトの《水蛇》や谷崎潤一郎  
の『人魚の嘆き』など、蛇のような生き  
物と女性が融合する表象が気になって、  
自作の問題意識と繋がるかも？と。そこ  
からアジア圏での表象の伝播、なかでも、  
海をはさんだ日本と韓国で共有されてい  
る物語のリサーチに発展して。

伝承のなかで人間が蛇になった  
り蛇が人間になったりする、そ  
の変容を生身でどう表現できるかと  
考えるうちに、作品が増えていった  
感じですよ

蛇に擬態し、蛇を演じ、蛇の物語  
を語る。もともと彼女は「行為する」  
作品で世に問いかける作家であった。  
自ら行為するということは、今を生

きる女性として表現すること。フェミニズム  
は、作品と表現に強く結びついている。

「学部生のときは、フェミニズムと聞いて思  
い浮かべるのは、上野千鶴子さんや田嶋陽子  
さん。90年代のテレビの印象が強くて『怖そ  
う』とか『強そう』とか(笑)。といつても、ほ  
んど意識することはありませんでしたね。  
油画(専攻)で絵を描きつつ、発表もしてい  
なくて、バイトしたり遊んだりしていました」  
転機となったのは、さまざまな学科の学生  
とともに舞台づくりに携わったこと。「修士  
課程を修了するころによくやく、人に見せた  
いという気持ちになってきました。行為する



大学美術館本館での博士審査展に出品された《蛇に似る》より。最初は、「体を黒く塗り、腕の部分だけを蛇に見立てるアイデアから」創作が始められたという。



ことと作品を発表することが、自分の中で結びつきはじめたんです」と遠藤さん。修了後、3年間の在野活動期間中に開催した初個展『アイ・アム・フェミニスト!』(2015)では、90年代に自身にも既成概念化されていたフェミニストのイメージを、自ら演じつつ

打ち破るというパフォーマンスを行った。「ろくでなし子さんが女性器の3Dデータを頒布したことで逮捕された事件や、西尾佳織さん演出の同性婚を扱った演劇に出演したことがきっかけになっています。ろくでなし子さんのニュースを見ていると、『女性がそ

んな活動をする、信用をなくすよ』と言われていたような気がして、社会が女性に抱くイメージに興味をもちはじめた。これまで自分がフェミニストに抱いていたイメージを反省することにもなりました」  
それから2年後の『アイ・アム・ノット・

上：女性の身体性からの脱皮をイメージさせる《蛇に似る0：晒》。中：神話の蛇に擬態した《蛇に似る3：川》。下：蛇の物語を漫才形式で語る《蛇に似る4：たまご丸》は、日本語と韓国語によるかけ合いの絶妙な組み合わせが愉快。(中・下の撮影=松尾宇人)

フェミニスト!』(2017)は、遠藤さん自身の結婚という、オンタイムの出来事を扱ったパフォーマンス。しかし、より生身の含有率が高くなったことは、少なからず創作に負担を背負わせることにもなった。作家個人の人生と作品が同一視されてしまうリスクは、ことに女性であれば、なおさらに高い。

「これまでの美術の歴史にも、同じような例があったんですね。たとえば、田部光子さんの《人工胎盤》(1961)が発表された当時は、作品の評価よりもまず彼女の身体について言及されたとか。一方でマーサ・ウィルソンのように、作家と個人を同一視するような視線をユーモアでかわす作品もあって……。今回、博士論文の執筆にあたって先行する芸術実践をまとめていて、時代や場所を超えてさまざまなアーティストと繋がっているように感じ、勇気づけられました」

同時に、「現代美術と呼ばれるものをつくりながら、今ここにある出来事ばかり気にするのではなく、現代と距離をとる必要もあるんじゃないかと思うようになりました」と遠藤さん。そうした考えを抱いた彼女が、学生

時代の総決算である博士審査展に、フィクションを絡ませた《蛇に似る》を出品し、博士論文『フェミニスト』から『蛇』へ 表象と物語を演じる複合的実践の研究』をまとめたのは、実に象徴的ともいえる。

「漫才の形式で物語りをしているので、作品が抽象的になったと思います。今まで私は自分にとっても近い、現実的なことを扱ってききましたが、その制作スタイルは、制作者の当事者を根拠にしたものだと気がつきました。それではいつまでも世界が小さいまま。実際、自分の肌感覚が届かない場所にも世界があるし、そこまでも思考は広げられるわけなので」

確かに、世界も動き続けている。フェミニズムの全世界的活性を高めることとなった#MeToo運動の興隆、ジェンダー・イクオリティ、LGBTをはじめとする性的マイノリティの尊重などは、一般社会にもアートのインにも大きな影響を及ぼしている。もちろん遠藤さんにも時代の振動は伝わっているが、それらを同時代作家の使命というより、もっと自由な機運として感じ取っている。

「去年参加した『彼女たちは歌う』(東京藝大

「LOVE YOU」プロジェクト展覧会・8(9月開催)のとき、キュレーターの荒木夏実さんから『あえての覚悟ゼロ』という評価をいただきました(笑)。私はフェミニズムも芸術実践も遊びだと思うし、一緒に遊んでくれる人を探すことだと思っているので」

性別も、人種も超えて世界をさらに広く捉え、交流できる。遮断と分断の時代と思われがちなコロナ禍の今も、遠藤さんは逆に可能性や希望を感じているという。

「海外のアーティストとも連絡が取りやすくなっているし、オンラインでのオープンディスカッションも増えているなど、ある点では情報の共有や連帯の呼びかけがしやすくなってきていますよね。私としては、向き合っておしゃべりをするように行為を続けていく、そんな関係性にフォーカスを当てていきたいと思っています。その先で、何か面白い発見があるんじゃないかって」

春からはフリーランスとして、再び世に出る遠藤さん。「まあ、なんとかなるな」というタイプ。たぶん、どこでも生きていけるといいます」と、タフな笑顔を見せた。

過去の自分を  
読み直し、いつも  
新しい気持ちで

## 鐵百合奈

大学院音楽研究科音楽専攻  
器楽研究領域(ピアノ)



てつ・ゆりな / 1992年生まれ。桐朋学園大学院大学講師を務めつつ、2019年から始めた『ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全曲演奏会』を継続中。第6回は4/25、渋谷・美竹清花さろんで。

訪ねた自宅の練習室は、グランドピアノノ台でほぼ空間が占められていた。完全防音の小さな部屋で積んだ訓練が、ひとたび演奏会となれば、エネルギーッシュで豊潤な旋律となつてホールいっぱい放たれる。昨年11月26日、第6ホールで行われた鐵百合奈さんの博士審査演奏会の曲目は、昨年生誕250周

年を迎えたベートーヴェンのピアノ協奏曲第0番と第4番。0番を2台のピアノで、4番を弦楽五重奏とともに、輝かしく弾ききった。「終わったあと、皆とも『本番がいちばんよかったね!』と話しました。ピアノ協奏曲はオーケストラと大ホールで演奏するのが常ですが、作曲された当時も小編成で楽しむ文化はあつたわけなので、そのことも踏まえて……。オーケストラとの演奏だったら遠慮して切り捨てる表現も、人数が少ないと機動性が高くて、より音楽的な会話もできるんです。本番の最中、『あ、いける!』ってテンポを上げて私が突き進むと、もう1台のピアノや弦楽がそれについてきてくれる、という感じがで」

表情からも、達成感が見て取れる。「弾くと前向きなエネルギーがもらえる」という大作曲家の作品を学生時代の集大成に選んだのは、年齢的なこともあつたという。「私がコンクールを卒業する年齢になつていたのも、大きかったですね。」

テクニクで点を取るコンクールでは、どうしても精神性で勝負するベートーヴェンの曲は選びにくかつたけれど、これからはやっと好きなことに邁進できるので」

演奏を磨き上げる一方、同時進行で執筆された博士論文「演奏解釈の流行と盛衰、繰り返される『読み直し』——18世紀から現在に至るベートーヴェン受容の変遷を踏まえて」は、ベートーヴェンの楽曲解釈の歴史の変遷を遡った大論。楽曲を現在、そして未来につなげるための緻密な考察が、演奏家としての確かな目線で綴られている。

実は少女時代から筋金入りの理論オタク



博士審査演奏会で使用したピアノ協奏曲第4番。手書きの楽譜は、演奏者の即興に任されるカデンツァ部分を鐵さんが作曲したもの。

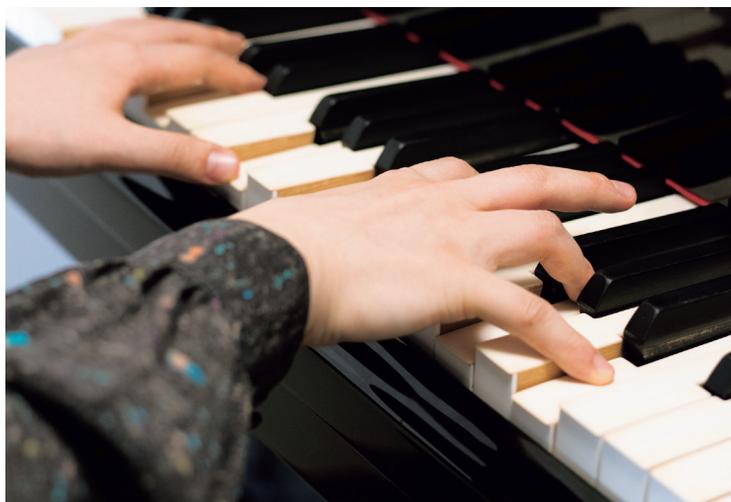
の鐵さん。香川県に生まれ、ピアノで頭角を現して東京までの遠距離レッスンに通う間、「本で得られる知識はなるべく本で読んで、無駄がないように」と心がけているうちに、分析癖が自然と身についていった。

「でも、藝高（東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校）の頃に、フランス人の先生のレッスンで『あなたは頭では理解しているようにだけど、演奏から何も伝わってこない』とズバツと言われて。それから、机に向かって本とにらめっこするだけでなく、コンサートに行つて実演をたくさん浴びて、自分でもサロンや試演会に出るようになりました」

理論は数々あるなか、一回限りの演奏においてたつたひとつの演奏法を選ばなければならぬのが、演奏家の宿命。分析を実際の演奏につなげることを、自身のテーマに据えた。「『先生がこう言つたから』とか『私はこの系譜（流派）だから』とか、何かひとつ信じるものがあれば楽だと思ふんです。でも、演奏は再現芸術ではあるけれど、その都度創造しなくてはならないもの。それに、私は雑草なので、選ぶ余地はあるなと（笑）。選んだとし

ても、過去の自分の選択を絶対に守りきれないかもしれないこともないですしね。読み直してしながら、常に新しい気持ちで音楽に接していくことが大事だと思つています」

新しい音楽との向き合い方は時代からも要請されるのだと知つたのが、2020年。コロナ禍で演奏会が次々に中止となるなか、音



楽家たちは配信での音楽活動を模索し、鐵さんも試行錯誤を繰り返した。

「たぶん歴史上、ここまで演奏家と聴衆が乖離したことって、なかったんじゃないでしょうか。演奏家の息遣いを伝えられる生演奏とは違って、動画配信は家で練習してきたものをほぼそのまま出すしかない。日常空間で聴くためには音量にも制限があるし、ミスタッチだつてなるべく少ないほうがいい……そうすると、人間が弾く意味はあるのか？ と思いつめたときは、自分はこの世界に必要なんだろうかと感じたこともありましたね」

それでも昨秋、自粛後初の演奏会では「出て拍手をもらっただけで泣きそうになるくらい、うれしかった」と鐵さん。「同じ空間に聴衆と演奏者がいて、後ろにオーケストラがいる。小難しく考えていたけど、演奏できて、こうして聴いてもらえるだけで幸せなんだな……と。生きているっていいなと、しみじみ感じました」

困難の年に学び舎を離れても、道は続き、音楽を創造する喜びは消えない。ベートーヴェンにとつても、きつとそうであったように。

# お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

## TOKYO GEIDAI ARTS FES

私たちの表現をお見逃しなく。  
<https://tokyogeidai-arts.geidai.ac.jp/>

### オンライン芸術祭で若手芸術家を支援 東京藝大アートフェス2021

コロナ禍で展示や演奏の機会が失われている在学生および本学出身の若手芸術家たち。彼らに作品発表の場を提供し、育成・支援する『東京藝大アートフェス2021』を3月18日〜4月30日にオンラインで開催します。会場は、ウェブ上に設けられた美術館や奏楽堂、ソーシャルメディアとも連携して国内外に発信することで、アーティストと鑑賞者・支援者が直接コンタクト可能になります。優秀作品は審査員による審査と観客の声やアクションを踏まえ決定し、受賞者には活動支援のため賞金が授与されます。才気あふれる若き芸術家

### 見て、触れて、買える 藝大アートプラザ



藝大アートプラザは東京藝大の出島として、常時1000点以上のアート作品を取りそろえています。「見て、触れて、買える」上野の新アートのスポットです。2学部14学科、大学院に在籍する学生と教員、そして卒業したアーティストの作品がジャンルを超えて一堂に会し、一点ものの作品がいつでも購入できるユニバーシティショップは、世界を見渡しても珍しいのではないのでしょうか。3月20日〜5月16日の展覧会『旅展／ここではないどこかへ』では50名以上のアーティストによる作品を通して、空想の旅へと誘います。来店がかなわない方に向け、ウェブでの作品紹介も充実していますので、ぜひご覧ください。  
<https://artplaza.geidai.ac.jp/>

### 音楽教育に携わるすべての人へ 藝大出版会の新刊

藝大出版会では、大学院音楽研究科音楽文化学専攻ソルフェージュ研究室の照屋正樹教授による教案集を出版しました。本書はソルフェージュの見地から、さまざまなジャンルの実作品を教材に、聴音、リズム、分析、視唱など音楽の基礎教育を行うための一冊。ソルフェージュ教育に携わる教師および学習者を対象に、長年にわたり教鞭を執ってきた著者が、実際の教育現場で培った実践的かつ効率的なティーチングプランを伝授します。藝大出版会の書籍は、藝大アートプラザでも販売中。最新情報は公式Twitter (@GeidaiPress) にて発信しています。



『フォルマシオン・ミュージカル教育法によるティーチングプラン 実作品を用いたソルフェージュ』  
3960円

大学美術館(上野)の  
展覧会

本館

渡辺省亭

— 欧米を魅了した花鳥画 —

3月27日～5月23日



《牡丹に蝶の図》  
1893(明治26)年  
絹本着色 一幅 個人蔵

美しさの新機軸

～ 日本画・彫刻 過去から未来へ ～

公益財団法人芳泉文化財団

第五回文化財保存学

日本画・彫刻研究発表展

※同時開催

模写の近代 模写の現代

公益財団法人芳泉文化財団

10周年記念特別展

6月5～13日

ポストコロナアートプロジェクト展

6月8～27日

藝大コレクション展2021 1期

雅楽特集を中心に

7月22日～8月22日



上：小倉遊亀《径》1966年 東京  
藝術大学蔵 ※1期のみ展示  
左：竹内久一《伎芸天》1893年  
東京藝術大学蔵 ※1期、II期とも  
に展示



SDGs x ARTS

東京藝大LOVE YOUプロジェクト

～ 藝術は人を愛する ～

7月22日～8月31日

藝大コレクション展2021 II期

8月31日～9月26日

再現—指示とその手順—

8月31日～9月26日

「ミロク」

— 終わりの彼方 弥勒の世界 — 展

9月11日～10月10日

陳列館

LOVE YOU プロジェクト2021

「展覧会」居場所はどこにある？」

6月1～20日(予定)

日本画第二研究室 素描展

6月23日～7月5日

工芸総合演習2021「視つめる

かたち—素材から表現へ—」

7月8～15日(予定)

「つながる糸ひろがる布」

テキスタイル三美大交流展

7月22～30日

うるしのかたち展2021

8月17～29日

一研展

— 日本画第一研究室発表展 —

9月3～18日

藝大ファクトリーラボ

成果発表展(仮)

9月22日～10月4日

奏楽堂(上野)の演奏会

藝大フィル定期第403回

4月23日19時

3000円

同声会新人演奏会 第1日

4月24日14時

2000円

同声会新人演奏会 第2日

4月25日14時

2000円

モーニング・コンサート1

5月13日11時

1000円

管打楽器シリーズ2021

フレッシュ・コンサート

5月19日18時30分

一般2000円

高校生以下1000円(要学生証)

モーニング・コンサート2

5月20日11時

1000円

藝大フィル定期第404回

新卒業生紹介演奏会

5月28日18時30分

2100円  
 創造の杜2021  
 藝大現代音楽の夕べ  
 6月4日19時  
 3000円  
 藝大チェンバーオケ定期第37回  
 6月6日15時  
 1600円  
 モーニング・コンサート3  
 6月10日11時  
 1000円  
 シンフォニーオケ定期第63回  
 (藝大定期第405回)  
 6月10日19時  
 1600円  
 モーニング・コンサート4  
 6月17日11時  
 1000円  
 モーニング・コンサート5  
 6月24日11時  
 1000円  
 藝大とあそぼう2021  
 雅楽とオルガンの科学  
 6月26日14時  
 高校生以上1000円  
 小中学生500円

未就学児無料(3歳から入場可)  
 モーニング・コンサート6  
 7月1日11時  
 1000円  
 ウィンドオケ定期第91回  
 7月7日19時  
 一般1600円  
 高校生以下500円  
 モーニング・コンサート7  
 7月15日11時  
 1000円  
 モーニング・コンサート8  
 7月22日11時  
 1000円  
 藝大プロジェクト2021  
 ピアソラ百年の旅路  
 7月24日時間未定  
 料金未定  
 モーニング・コンサート9  
 7月29日11時  
 1000円  
 和楽の美  
 『古の花』  
 7月31日時間未定  
 料金未定  
 藝大プロジェクト特別編

音楽劇《エグモント》  
 くゲーテによる悲劇く  
 8月29日時間未定  
 5000円  
 モーニング・コンサート10  
 9月9日11時  
 1000円  
 ジャズin藝大2021  
 9月11日時間未定  
 料金未定



奏楽堂

＊展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト(<https://www.geidai.ac.jp/>)をご覧ください。  
 ＊展覧会についてのお問い合わせ  
 東京藝術大学美術館  
 ☎050-15541-8600  
 (ハローダイヤル)  
 ＊演奏会についてのお問い合わせ  
 東京藝術大学演奏芸術センター  
 ☎050-15525-12300  
 ＊演奏会チケットの取り扱い  
 ヴォーナル・チケットセンター  
 ☎03-15355-1280  
 チケットぴあ  
 ☎0570-102-9999  
 藝大アートプラザ(店頭販売のみ)  
 ☎050-15525-12102  
 東京文化会館チケットサービス  
 ☎03-15685-0650  
 イープラス  
<https://epi.us.jp/>

## ○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜りました皆様に、深謝申し上げます。  
本号では、2020年11月から2021年1月までに寄附の申し込みをされた皆様を  
掲載させていただきます(掲載をご承諾された方のみ)。

### [個人の皆様]

佐藤隆幸様 36万5000円

窪田卓様 30万円

遠山敦子様 10万円

平山一哉様 10万円

山下正明様 10万円

熊本昭彦様 5万円

田中寧様 5万円

細田薫様 5万円

秋葉弘実様 3万円

澤田及子様 2万円

藤本昌志様 2万円

渡辺孝様 2万円

蟻川隆正様 1万円

上田武夫様 1万円

上原由美様 1万円

内田良一様 1万円

小川恭範様 1万円

河野里香様 1万円

佐伯禎子様 1万円

栄克朗様 1万円

鈴木敦子様 1万円

富山紀美子様 1万円

外山雄三様 1万円

中村篤様 1万円

福田典子様 1万円

本多正和様 1万円

松村一義様 1万円

森實亜紀様 1万円

秋山境様 5000円

島野聖章様 5000円

藤本洋子様 2200円

峠聡美様 2000円

阿知波千晶様

有坂恵美子様

井川志美様

石井洋様

石井敬孝様

石田徹也様

石橋宗弥様

泉玲子様

井出久實子様

内田美保様

萩野清子様

齋藤勝之様

坂口棕治朗様

塩澤倫子様

塩澤充泰様

出倉令子様

永坂友康様

新山明子様

二代目花柳壽應様

野鳥やすゑ様

福岡直太郎様

吉田久美子様

### [法人の皆様]

合同会社アンブラグド様 5万円

ソフィア株式会社様 1万円

株式会社IKI(東京藝大発ベンチャー)様

## ○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実行と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。



藝大生に緊急の支援を。若手芸術家に活躍の場を。

### 「若手芸術家支援基金」

東京藝術大学基金へのご寄附は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、展覧会や音楽会の中止などで影響を受けている在学生および本学出身の若手芸術家を支援する「若手芸術家支援基金」の原資となります。そして「若手芸術家支援基金」では、『東京藝大アートフェス 2021』の開催(→P42)、在学生への修学支援、学生などが開催する展覧会・演奏会への助成といった応援プロジェクトを実施しています。

### ☎お問い合わせ

社会連携課渉外企画係 ☎050-5525-2400 藝大基金ウェブサイト <http://fund.geidai.ac.jp/>